

目 次

実り豊かな学生生活を .....	天野学部長	2
特集：学際性を再検証する .....	編集部	3
• 社会科学コースと王貞治		
• 世界の萬屋，地域文化コース		
• 言葉の錬金術師，外国語コース		
• 数理情報コースは，日々進歩している。ふふふっ		
• 戦え！自然環境コース		
• あのさあ，物・生ってさあ…		
• 生体行動コースは夜明けに涙をこぼす		
新任紹介 .....		21
研究室紹介（自然環境・数理情報・地域文化） .....		29
街の総科——段原再開発事業についてしみじみと考える！ .....		33
春季ソフトボール大会の報告 .....		37
学部の記録 .....		38
飛翔箱 .....		40
編集後記 .....		43

## 「実り豊かな学生生活を」

天 野 實



広島大学に総合科学部が創設されてすでに16年になる。日本ではじめての新しいタイプの学部に入學し、総合科学部の学生になって半年または4年近く学生生活をしている諸君はどのような感想をもっていることだろうか。最高に良い学部に来て良かったと実感しているだろうか、それとも入学以前にもっていたイメージとは異なっていると感じているだろうか。私は過去に日本の教育制度であった旧制高等学校で3年間すごした人間の一人である。現在60歳以上の旧制高等学校生活を体験した人達がいまだにすばらしい良き思い出を持っているのは何によるのだろうか。第一に専門バカでなく人間的な先生との深いふれ合いをもったことだったように思う。第二に学生は文系理系とクラス分けはあったけれども、三年間の生活の間に将来自分とは異なる専門分野に進む可能性をもった良き友人が持てたことではないかと思う。

良き先生と学生数人で語り合う機会が多くあったのはどうして可能だったのか。あまり食料事情のよくない時期ではあったが我々学生は歩いて行ける所に下宿していたし、先生も歩いて行ける所に住んでおられた。時間的にも楽であった。しかし最も大切なことは、先生方が自分の専門の授業のなかでもたえず我々学生が将来社会に出て生活して行くに当たって何が大切か、人間としての大切なことを語り議論されたことであろう。だからこそ我々学生も先生を尋ねて更に議論を深め自分の人生の指針を確立しようと努力したい気持ちになったのではなかろうか。人間的幅の広い先生が多かったことも事実だが、「おのづか一芸に秀でれば意自ら通ず」との雰囲気を持っておられ自信を持って対応して下さったように思う。最近一般教育に対する批判も色々出ている。国立大学協会の特別委員会が大学卒業生に対して行ったアンケート調査で興味深い結果が出ている。卒業後5年の場合は一般教育に対して必ずしも肯定的ではないが、20年を経過した者は一般教育を様々な

形で高く評価している。特に社会に出て責任のある立場で仕事をしている色々な分野の人達は学生生活の中で一般教育を非常に高く評価している事実がある。総合科学部創設の理念の一つに専門指向型ではなく、核となる専門分野を持ちながら裾野の広い研究教育を行う学際的な学部作りがある。このことがどれだけ学生の教育に成果をあげて来たか常に反省しなければならないが、少なくとも創設以来16年たった今、最近の卒業生に是非我が社に来て欲しいと強く依頼をされる企業の多いことは、まさに我が学部の卒業生が今述べた総合科学部の理念を体得し社会のニーズにこたえて頑張ってくれていることの結果であると自信を深めている次第である。学生諸君どうか総合科学部の先生方の人間的な面にもっと深く接し、色々なことを吸収し、自分の人間的成長の糧としてもらいたい。

専門分野の異なる友人が得られることについては、総合科学部は一学部一学科であり入学後コースに所属するまでの一年間は殆ど何の異なる所もなく、同じ学部生としての色々な行事を共にすることの楽しさは充分経験していることであろう。入学後のオリエンテーションキャンプでの共同生活、安芸の国の合唱キャンプファイヤー、秋の沼田研修などでの同期生としての仲間意識の確立は他の大学生生活では得難い体験であろう。更に忘れてはならないことが一つ、初代学部長今堀先生が是非とも考え作られた総合科学部の学生研究室の存在である。教官・事務職員が非常に狭い建物空間で頑張っているにもかかわらず何とか捻出して作られたのが学生研究室である。広さも設備も充分ではないがとにかくにも総科の学生が集まり楽しく語り合える場が存在することの意義を考え有効に活用してもらいたい。火災などには充分注意して、きれいに使用してほしい。自分達の場所である。自分の下宿の部屋と同様に考えて気配りをしてもらいたい。今の若い人達は何か醒めている所があるとよく言われるが、何か夢をも

ち続け友人と自分の夢を語り合って友達の輪を拡げてほしい。自分から心を開いて語り合えば答えてくれる友人ができるものである。友人と日常の出来事について語るのも良いが、時には自分の考えをまとめて話し合う機会をもってほしい。それにはやはり自分なりの意見をまとめる必要がある。自分で考えるのみでなく関係のある良い本にめぐり合い、じっくりと著者と対話する読書の習慣をつけ、良い友人作りを努力してもらいたい。

以上述べて来た学生生活における大切な二つのことが可能な学部が総合科学部である。我々の学部の長所を有効に生かし充実した学生生活を是非送ってください。

## 予 告

「人は、その愛せしものの  
偉大さにおいて偉大であった」

— キルケゴール —

「人間に不可能はない。  
あるのは負けを認めるおのれの姿だ」

— アントニオ猪木 —

総合科学部の学生は、総合科学部の魅力にひかれてやってきた。その学生たちのつぶやき。

- 一つのことにとこだわって勉強するより、いろいろなことを幅広く学びたいと思った。
- 既成の分野にこだわらず、広く研究したい。
- 他学部とは異なり、学際的な勉強ができる。

総科生は、総科が学際的であるから、学際的センスの素養があるという。

ひきつづき学生たちのつぶやき。

- 講義の関連性がやすい。
- 専門の講義が一般と変わらない。
- 他コースとの交流が少ない。
- 成績でコース分けがおこなわれるのは悲しい。
- 甘さがまだある。

なんだかよく分からない意見もある。学生の努力不足も否めない。過去の飛翔でも、しばしば触れられてきたが、常に結論は「学生はもっとガンバレ」であった。しかし、今回は一歩つっこんで、総科の本質を考えてみたいと考えた。

けども!



## 特集：学際性を再検証する。

「飛翔」編集委員会は、今年5月に1・2年生を対象としたアンケートを実施した。アンケート内容は、①総科に来た（総科を選んだ）理由、②総科に対する不満、である。この結果、次のような回答が得られた。

まず、①については、やはり「受験科目」「地理的理由」が多かった。また、「志望コースがあった」人も多かったが、「全国でもめずらしい学部だから」「2年次にコースが選択できるから」「いろいろなことができそうだから」という回答が目立った。

一方、②については、「気に入って入学したので特に不満はない」という回答も多かったが、「校舎・設備が古く、貧弱」「2年次でコースが決まるといっても、要望科目などの束縛が多く、事実上1年でコースが決まっているようなもの」「いろいろなことができそうだが実はそうでもない」「他学部と比べて自分の専門を深く学べない」といった不満も多い。

このようにならりの学生が総科に対して何らかの不満を持っている。その中でも総科の「いろいろなことができそうな」ところ、つまり総科の特質である「学際性」について疑問を感じているといえるだろう。

広島大学総合科学部は昭和49年に創設された。創設当初の4コースから、昭和62年のコース改組で地域文化・社会科学・外国語・数理情報科学・物質生命科学・自然環境研究・生体行動科学の7コースとなり現在に到っている。伝統的な日本の大学は専門指向型で、専門分野や学部間の壁が厚く、隣接分野へと視野を広げる努力は軽視されてきた。しかし現代の高度な科学・技術の発展は、これまでの個別科学の枠組ではとらえきれない社会的課題を生み出し、この課題にこたえるために、各専門分野の協力による幅広い教育研究が必要とされるようになった。そのために、総合科学部では、核となる専門分野を持ちながら、それを越えた視野の広い教育研究をおこなう「学際的な学部」を目指して、新しい研究成果を取り入れた柔軟なカリキュラムが試みられている。この試みは日本の大学教育に新風を吹き込むニュータイプとして評価されている。

…と、言われているが、実際にはどうなるのだろうか。アンケート結果では、この総科の「学際性」について疑問を感じている学生が多いことがわかる。総科は学部が言うように、本当に「学際的な学部」なのだろうか。それぞれの授業が、有機的に作用すべく配置されているのかどうか、授業の内容は「学際性」に対応しうる柔軟さをもったものなのかどうか、等の問題を、総科の各コースに類似する他学部とのカリキュラムの比較・検討を中心に、検証してみたい。



# 社会科学コースと王貞治

『総合科学部社会科学コース』なんて言うと、もう世の中の森羅万象その他うごうむごうといった問題を扱う場所のように感じる。講義概要には、ペレストロイカやリゾート法などといった Up-to-date な内容の講義がずらりと並んでいる。社会科学コースの学生は、これを読んで、したり顔で「うむ」と腕を組んだり、「うはうは」と興奮したりしている。

よく言われることだけれど、経済学部や法学部では1年次から基礎専門科目として経済学概論、統計学概論、経済数学、簿記、法学入門、政治学入門、民法などが開講されていて、専門課程に入るまでのトレーニングが必ず課される。それは理論及び基礎中心であり、のちの専門研究のこやしとなるのだ。そのためか、経済学部や法学部の卒業研究のテーマは「ケインズ経済学について」とか「行政判例の検討」といった具合に、がちりと理論で固めたものが多く、面目躍如といったところだ。

社会科学コースも負けてはいない。春の「飛翔」に総科生の卒論テーマが掲載されているので見てもらおうと分かるのであるが、非常に Up-to-date なのである。つまり、理論をしっかりとおさえた上で先端の問題をとり扱うという姿勢の表れである。しかし、この姿勢を貫こうと思ったら、よほど意識的に時間割をたてる、あるいは本を読むことを心がけないものにはならないという思いが強い。まわりくどくなった。たとえていえば、王貞治のフラミンゴ打法は、通常の打撃フォームをふまえた上での産物なのだということだ。

総合科学部の良いところは入学してから自分の専攻を考える時間があることである。先日行ったアンケートでもこの点は明らかだった。とくに社会科学コースでは、「社会科学」という間口が広いだけに3年のゼミ決定時まで専攻決定の猶予がある。これに甘んじていると、統計法も知らずして経済のゼミに入るといった迷える子羊が生まれてしまう。社会学では専門の勉強に耐えうるための準備トレーニングは自分に任されるのである。科学では全員が無意識のうちに、“Laissez-faire (自由放任)”の原則下に置かれているのである。なんだかものすごい展開になってきたけれど、このような社会学の環境で、迷え

る子羊とならないためには、学生側にも王貞治的なプロ意識が必要なのだろう。「自分の専門領域を核としつつ最先端の問題にアプローチする」という理念を貫くのは、「マークシート世代」である学生にはなかなか難しいのである。いや、人のせいにするのは卑怯なのでマークシート問題はおいておこう。

「上の理念をレベルを落とさずに達成するには時間をかければ良い。しかし4年間という時間は限られたものだから、あとは密度を濃くするしかないね」とある先生はおっしゃった。学生としては肝に命じておかねばならないだろう。先生方にもたえず学生を叱咤激励していただきたいとも思う。学生も先生もすべての人がプロ意識を持つように心がければ、真の「総合社会科学」に近づける筈だ。

そう考えると、王貞治は偉大だなとアンチ巨人ながら僕は思った。 (文責：中家 伸之)

◇◇◇ ◇◇◇ ◇◇◇

それでは、前述の記事の内容をふまえつつ、社会科学コースのA先生に、『総合科学部で学ぶことのメリット』についてお話をお聞きました。

飛翔「先生、今日は総合科学部で学ぶことのメリットについてお話をして頂きたいのですが。」

A「それは、つまりどういう意味なの？」

飛翔「ええ、つまりですね、法学や政治学でいえば法学部、経済学でいえば経済学部といった形で、それぞれに専門学部があるわけですよね。そういったものがきちんとあるにもかかわらず、総合科学部で学ぶメリットというか、総合科学部の存在理由というか、そんな感じでお話して頂ければ。」

A「なるほど。では、まずですね、総合科学部の設立理念についてですが、これは『現代性、総合性、国際性』という三本柱があります。この三つの理念のもと、常に前進し、時代を先どりし、社会に対して提言をしていくと、まあ、そういったところですかね。そういった意味で、卒論などを見れば、この記事にあるように、まさに Up-to-date なものが

多く、この理念が反映されているとは思いますが。」

飛翔「ふむふむ。すると、この記事の内容はズバリ的を射ているということですね。」

A「そうですね。」

飛翔「ということは、総合科学部のメリットはまさにそこにあり、それはきっちりと生かされているというわけですね。何か、あっさりと結論が出てしまいましたねえ。」

A「いや、しかしこれはまだ結論にはならないんですよ。今、私は『卒論などを見てみれば』と言いました。ですから、あくまでも、卒論オンリーですね。卒論だけを見てみれば、一見、理念が生きているかに見える、と。しかし、実際は考えねばならないことだけです。」

飛翔「といたしますと？」

A「つまりですね、『現代性、総合性、国際性』というのは、あくまでも学部としての設立理念である、ということです。私は、教官という立場上、学部側の人間として今の話をしたわけで、学生がそういった大学や教官の話を鵜呑みにしてしまうのはどうかと思います。しかし現実には、そうした極めて受身の人間のなんと多いことか。素直すぎるというか、変な奴がいない。全体的に小粒な気がします。「大学生らしさ」というのは、頭を鍛え、自己の思想体系を形成することにあると思うわけです。そのためには、もっと考えることをしなければなりません。受身では駄目です。しかし、今の学生はあまり考えてないのではないのでしょうか。それが端的に表れているのが、授業中に質問や反応がないことです。いわゆる『真面目な』学生というのは、毎回きちんと授業に出て、私の喋ることを逐一、ノートに書き写しています。しかし、それだけです。それでは大学の講義とはいえない。高校の授業と同じです。私は、自分の講義は自分の研究発表の場であると考えています。確立された理論をそのまま教えているわけはありません。そういうものは本を読めばわかるわけですから。つまり、何が言いたいかというと、私の話していることが正しいとは限らないわけですよ。もっと考えながら聞いて欲しい。間違いや、おかしな所を発見、指

摘して、私を困らせてやろう、くらいの意気込みでいて欲しいのです。社会科学というのは本来、社会“批判”科学であるべきなのです。大学や教官の言うことを無批判に受け入れるだけでは高校生と同じですよ。」

飛翔「非常にパンクな考え方ですね。つまり、学生の立場は、大学というエスタブリッシュメントに対して抵抗するパンクロックでなければならないと。我々学生は、大学という体制に唾を吐きかけ、先生達に中指をおっ立てるような、パンクスであるべきなんですね。」

A「その通り。ロックンロールの怒りを忘れてはならないでしょう。怒りのないロックンロールは単なるポップスカアイドルです。そういう意味で、見た目だけロックで、実際には、やってる事やアプローチの仕方が、ほとんどアイドルと変わらないという、最近のバンドブームの現状は、現代大学生事情に非常に似てますね。」

飛翔「なるほど。総合科学部のメリットの話が、現代大学生論へ、さらには現代ロック論へと発展してしまいましたね。総合科学部とロックがこんな風に結びつくとは思いませんでした。つまり結論としては、常に不満や批判・疑問を忘れず、自分の頭で考え、行動しろ、と。パンクな王貞治こそが、理想の大学生の姿であると、そういうことですね。」

A「まあ、そういうことですか(笑)。極端な話、この記事だって信用しなきゃいけないってことですよ。」

※注— この記事は実際に行なわれたインタビューをもとにして、エッセンスはそのままに、任意に脚色・再構成したものです。

#### 社会科学コース専門科目について ～惰眠をむさぼる世界～

ありとあらゆる問題が複雑にからみあって解決できない現状に対して、何が、どんな方法が有効に働かせるのか。とりあえず、手のつくところから始めさせてもらう。もう、言おうとして言えなかったことも言ってしまう。

まず、平和学(水曜日・四コマ)の〇〇教官。授業が殺人的につまらない。思いついたことをだらだ



らと話しており、結局何が言いたんだかさっぱりわからない。オゾン層もありゃ君が代もあり、有事立法もありゃ農耕もある、うーん困ったねえ、という総合科学部のひろくあさく要素を集めて3日間ナベで煮こんだような授業である。「平和学」という理想高き講義題目に心ひかれてやってくる純真な少年少女もいるのだ。もう少しねらいのはっきりした授業をしてほしい。

次に、国際政治論の××教官。授業内容は国際政治とおよそ関係のない、彼の嫌いな学者・評論家に対する批判・悪口や、超個人的な昔話などなど。あげくの果てには試験日だというのに酔っぱらって研究室で寝ている。ここまで徹底されるとむしろ爽快で、さわやかな五月の風を思わせるのだが、それも

言ってもらえない。

ここにあげた2人も含めて、全ての教官に言いたい。第一回目の講義には、これから十五回の講義で何について自分は話すのかを書いた計画表を配布して欲しい。その目的とするところや、参考文献等が示されてあればなお良いだろう。教員として飯を食っていくのであれば、それなりのサービスを提供していくのは当然の義務である。また学生は、適当にやっていれば単位をくれる教官に甘えることなく、与えられるべきサービスを要求していかなければならない。批判しあえない、言いたいことがいえない環境というのは、退廃をまねくだけである。

(文責：竹内 憲司)

## 世界の萬屋・地域文化コース

総合科学部の学際性を追求するべく、地域文化コースでは、文学部との対比をからめつつ、総科のめざすべき方向と現実とのギャップに、問題点を見いだしていこうと思う。

まず地域文化コースの、専門教育科目を、独断と偏見で、わかりやすく類別してみた。ご存じのとおりこのコースは7つに分かれている。それぞれの群で、どんな科目が設置されてるだろうか。

	卒 論	I 日 本	II アジア	III ヨーロッパ	IV イギリス	V アメリカ	VI 比 較	VII 民 族
プロ通・語学・現代思想	✓	○	○	○	○	○	○	○
地域学・地理学	3	○	○	○	○	○	○	○
歴史学	5	○	○	○	○	○	○	○
哲学・宗教	1	○	○	○	○	○	○	○
文 学	6	○	○	○	○	○	○	○
政治・経済学	6	○	○	○	○	○	○	○
言語学	0	○	○	○	○	○	○	○
美 学	2	○	○	○	○	○	○	○
人類学	1	○	○	○	○	○	○	○
文化(生活・思想・ 民俗・社会・その他)	3	○	○	○	○	○	○	○

I群からV群では、ある特定な地域を様々な分野の視点からとらえようとする試みがみられる。しかし、すべての群が、すべての分野をもっているわけではない。VI群・VII群は、地域文化コースの中でも特殊な位置にいる。実際には地域研究というより、VI群は美学と哲学、VII群は人類学と途上国開発研究

を中心とする授業が行われている。

こうしたカリキュラムを経て学生たちは卒論に取り組むことになるわけだが、最後に選ばれたテーマは、いかなるものなのか、去年の卒論を、題目や指導教官を参考にしながら、分野別に分けてみた。おそらく、2つ以上の分野にまたがる内容の研究は、少なくなかっただろうが、ムリやり分けると、表のようになった。文学と政治経済学分野が多い。

総科の短所としてよく言われているもののひとつに、専門が浅くなりがちだということがある。卒論で、似たようなテーマをとりあげることの多い文学部のカリキュラムをのぞいて、総科と比較してみよう。

文学部は、哲学科(西洋哲学・中国哲学・インド哲学・倫理学)、史学科(国史・東洋史・西洋史・地理学・考古学)、文学科(国語国文学・中国語中国文学・英語英文学・ドイツ語ドイツ文学・フランス語フランス文学・言語学)に分かれている。まずは、1年から3年までの時間割を比べてみる。

次々頁表、コマ数を見る限り、忙しさはどちらも同じくらいようだ。(注：文学部の人は資格取得のための単位をとっている)専門の数も同じくらいだが、文学部の専門と、総科の専門とを、同じものさしで測るのは間違っている。総科の専門内には、現代思想あり、プロ通あり、そして外国語特別演習の占める割合が大きい。文学部の専門内にも、専攻

科目の他に、関連科目があり、同じ学科内の授業と、古典語を選択できる。しかし、これは、あくまで専攻と関連しているのであって、総科と比べると、専門性はより高く、限定的であるといえるだろう。

#### 専門履修単位数

	一般	必修	自由選択	卒論	計
文学部	40 (語学12)	専攻科目 関連科目 36 + 20 = 56	12	8	128
総科	40 (語学14)	選択必修 全コース or コース内必修 30 + 18 = 48	28	6	136

文学部では専攻科目が、地文では選択必修が、専門の柱となる。表からわかるように、必修は文学部の方が8単位も多く、自由選択は地文の方が16単位も多い。文学部がより専門的に深く地文がより選択の幅が広いことがわかる。

総科の利点としてよく言われることのひとつに、1年間の猶予期間がある。さらに、コースに分かれた後にも、コース内の広い選択肢の中から、どの道に進むか決定しなくてはならない。入学以来専攻が決まっている文学部との差を埋めるべく、総科生にはそれなりの勉強量が必要といえるだろう。次々と迫りくる選択に、目先の利益のみで対応していると、すべてが中途半端になり後々泣きをみる。総科の利点は同時に短所といえるのだ。アンケートを見る限り、学生達はこれをうすうす感じながらも、この短所を埋めるだけの努力を尽くしてないのが多くの現実であるようだ。

さらに、地文における学際性を突きつめていくと、学生自身の興味の分野と、現実の教官の専門分野とのギャップからくる学生の不満の存在がみえてくる。また、カリキュラムによって組まれている科目の授業内容が、実際は教官の専門分野によって左右され、本来のあるべき姿とは、異なっているという現実もある。

これらは総科の避けえない問題なのかもしれない。しかし、せっかくなんでもありの総科に来たのだ。多彩な教官や、柔軟なカリキュラムをフル活用しない手はない。避けえない問題をなげくより、それを含みこんでしまうような手を考えるべきだ。そのひとつとして、学生と教官とのコミュニケーションをさらに進めることがあると思われる。いろいろな教

官方の研究内容がどんなものか、知る手だてがもっとあってもよいし、学生達は、そのくらいはもっと貪欲に、調べるべきだ。また他方で、学生達の興味がどこにあるのか、教官方はもっと知っていていいはずではないか。専門分野の枠を取り払うことが、総科の建学の精神だった。大学でありがちな、閉鎖性、かつバラバラ状態を、くずしていくことが、総科の学際性のめざすところのものではないか。これは大学のシステム自体を問い直すもので、そう簡単に、変化することではないだろうが…。総科が創られて、16年。学生、教官、共に、総科にいる意味を考えなおしてみてもどうか。

(文責：野村 幸代)



〈西洋哲学〉

1年前期 必修2コマ

	月	火	水	木	金	土
1	保体	地理学	英語	芸術学A	微生物	
2	国憲	哲学	コンピュータープログラミング	独語	体実	
3		独語		英文学特演I	英語	
4	独文学特演I		音楽			15コマ

1年後期 必修2コマ

	月	火	水	木	金	土
1		哲学	英語	芸術学A	生態学	
2	国憲	政治学A	社会学	独語	体実	
3	遺伝学	独語		英文学特演I	英語	
4	独文学特演I					14コマ

2年前期 専門6コマ 自由2コマ(資格のため1コマ)

	月	火	水	木	金	土
1			芸術学A			独語
2	教育原理I	美術史	法学	哲学演習I	ギリシア語	
3		西洋哲学史概説III	倫理学演習III	比較文化特演A		集中倫理想史特講I
4	ラテン語I	独語		ヨーロッパとは何か	時事英語	

2年後期 専門8コマ(資格のため2コマ)

	月	火	水	木	金	土
1						独語
2	倫理想史概説I	哲学演習I	比較芸術学A	西洋哲学史概要III	ギリシア語	社会経済史
3	教育心理学	体実	倫理学特講II	経済学A	倫理想史演習II	
4	教育原理II	独語		倫理想史演習II	倫理概説I	16コマ

3年前期 専門9コマ 自由3コマ(資格のため4コマ)

	月	火	水	木	金	土
1						
2	倫理想史概説II		哲学演習II	社会教育学概論	社会教育学講義	
3	青年心理学	地域学II	人文心理学特講I	西洋哲学史概説I		
4	道徳教育の研究	哲学演習	西洋哲学史概説II	哲学史演習I	日本近代史講義	17コマ

集中：哲学特講、倫理学、博物館学、インド哲学特講II

〈II群アジア研究〉

1年前期 自由1コマ

	月	火	水	木	金	土
			心理学			
行動科学	哲学	アジア史	中国語I	微生物概論		
英語I	創造とは何か	中国語I	英会話I	技術史		
中文特演I	文化人類学		適応理論	体実	15コマ	

1年後期 自由1コマ

	月	火	水	木	金	土
			心理学			
行動科学	哲学	社会学	中国語I	微生物概論	天文学概論	
英語I	創造とは何か	中国語I	英会話I	技術史		
中文特演I	文化人類学		適応理論	体実	16コマ	

2年前期 専門6コマ(内2語学) 自由8コマ

	月	火	水	木	金	土
保体	地域開発論I	アジア宗教人類学	パーソナリティ論	英語II		
		社会調査法	プロ通	中国史		
言語芸術論	アメリカ政経研究	英語II	中国語読解法演習I	現代中国語語法演習	集中1コマ	
		アメリカ社会文化研究	現代国際政治論	アジア政治研究	16コマ	

2年後期 専門8(内2語学) 自由2コマ

	月	火	水	木	金	土
体実		アジア宗教人類学		英語II		
	地域学	中国語表現法演習I	現代思想	中国史		
	国際開発論II	英語II	中国語読解法演習I	現代中国語語法演習		
	比較政治外交論	音楽	アジア民族学	アジア政経研究	15コマ	

3年前期 専門8(内2語学) 自由2コマ

	月	火	水	木	金	土
					中国語会話I	
	イギリス地域研究	中国語表現法演習I	イギリス文学特別演習			
		アジア民族学演習	文化交流論			
	現代中東研究演習	平和学I	アジア史研究演習	アジア地域研究	10コマ	

## 言葉の錬金術師・外国語コース

「総合科学部って一体何なんだろう？」と私達が思う時に、必ず出会うのが「学際性」という言葉のように思います。ここでは、外国語コースについて教育学部の英語教育（教英）と、文学部の英語学英文学（英文）と比較することで、その学際性はどうなっているのか見ていこうと思います。ただ、外国語コースには、英語の他にドイツ語、フランス語を主とする群があるのに、英語についてしか言及していないため、片手落ちな比較になってしまったと言えます。だからこれはあくまで外国語コースについて考える上での断片的な資料としてとらえて下さい。

比較の材料としては、各学科のカリキュラム、時間割（各学科から1人ずつに時間割を教えてください。）、数人へのインタビューから得られた感想を使いました。以上から私なりに感じた各々の特徴を述べますと…

### — 教英

やはりと言うか当然と言うか、「教育」が講義の中の大きなウエイトを占めています。話を聞いた中でも、“英語をいかに教えるべきか”が中心となっているということが出てきましたし、時間割にも教育学科専門や、一見して教育関係とわかる講義が多い（特に5セメスター）ようです。それから、英文の専門が教英の専門の中に含まれている部分もあるため（次頁カリキュラム表参照）文学部専門の講義もよく見られます。

### — 英文

英語学、英文学、英米文学語学（アメリカ文学）の各々から14単位ずつ履修することになっていて、4年生になるとここから卒論の方向を決めることになります。また関連科目として、自分の専攻外の他の文学部の講義14単位を履修すること（カリキュラム表参照）も特徴と言えるでしょう。

### — 外国語コース

まず、外国語の演習が数と種類の両方の点で豊富という感があります。また会話演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲが必修でもあり、教英・英文と比べると“実践性”が強く前面に出ていると言えそうです。ただし、現実には、即実践的と言えるかとなると、“？”ということになります。これは後からまた述べるとして、私が総

科らしいな、と感じたのは、選択必修科目群中に、地域文化コースと社会科学コースの講義が含まれていること、と自コース以外の授業科目を12単位まで含まなければならないという指定です。これらから、外国語コースは、“言語”をコトバそのものというより“文化の中のコトバ”として位置付けていることが窺えるように思えます。それは、4年間の集大成と言える卒論の比較をした時も強く感じられました。教英では、LLに関する考察という様な、教育についての研究が殆どと言えます。英文では、例えば、ソネットを通してのキーツの詩の発展といった文学についての研究がメイン、の感がありました。一方、外国語コースは、前年度に初めて卒論が出たという点で、そこからいきなり外国語コースの特徴と言ってしまうのは少し乱暴かもしれませんが、全10篇の論文の題目は、異文化適応もあれば、日英語の対照研究もあり、で単一のジャンルに区分してしまうことは難しそうです。ただ、共通して文化としてのコトバ、と言うか、コトバを通して文化を研究している印象を受けました。これから毎年、論文が出る中でこの印象は変わって行くかもしれませんが、ジャンル分けの難しさに表われている多様性は、変わっていかないように思いました。

比較というマナ板にのせさせてもらった3学科とも、各々自分の“味”を出してるなあ、と実感を持ったわけですが、総科の味である“学際性”は、まだその内容も表現する方法も確立していない気がします。また、何人かの人と話をして出てきた実践性についての問題も、「実社会に対応していける語学力を」という触れ込み（飛翔No36より）と大学の持つ学究性と、学生の期待の三つが各々ずれている様で、修正が必要な点だと思います。

最後に、御多忙な中、協力して下さいました方々へ、本当にどうもありがとうございました。

（文責：岸本 詩子）

## 〈カリキュラム表 (専門のみ)〉

### ◎ 教 英

教科教育総論	2	
教科授業研究	2	
英語教育学Ⅰ Ⅱ	4 2	
英語学 英米文学	4 4	} 英語科内容学
当該専修科目	12	
選 択 科 目	30	内容学と英文の専攻との24単位含
教 育 学	4	教育学科の授業科目
心 理 学	4	心理学科の授業科目
卒 業 論 文	8	

### ◎ 英 文

英語学	14	} 教英の選択科目と対応
英文学	14	
英米文学語学 (アメリカ文学)	14	
英語学, 英文学 英米文学語学	2	卒論指導
関 連 科 目	16	┌ 言語学概論(学科共通) 2 └ 国文, 中文, 独文, 仏文14
自 由 科 目	8	
卒 業 論 文	8	

### ◎ 外国語コース

全コース共通	10	特別研究6, 現代思想, プロ通
外国語特別演習A	8	主とする外国語, 会話6単位含 副とする外国語
外国語特別演習B	4	
総 合 論	4	
選 択 必 修	28	
自 由 科 目	28	自コース以外12単位含

BON JOUR

GUTEN TAG

HELLO ...





# 数理情報コースは、 日々進歩している。ふふふっ

数理情報科学コースは、情報化社会の急速な発展により、大規模なシステムの開発が不可欠の課題となった今日、単なるコンピューター技術者ではなく、総合的な理論の構築力と緻密な思考力を兼ねそろえた人材を育成するために設けられた。具体的には、数学を基礎に、確率および統計学、情報学を学ぶところである。

広島大学内で数理情報科学コースと似た学問を学ぶところに、理学部数学科、工学部第2類システム工学課程がある。これらの学科と比較して、数理情報科学コースの内容・特色・問題点を探ってみたい。

## 理学部 数学科

専門科目は1年前期から始まる。数学全般の基礎を1、2年次に学び、応用を3、4年次に学ぶ。

専門科目のほとんどが数学であり、講義+演習の型をとる。講義数・演習数共に数理情報科学コースの数理系の2倍以上なので、より内容が濃い。ただし、確率・統計学は基礎的なものにとどまっている。コンピューターについては、コンピューターの扱い方がわかるようになるという程度で、コンピューターの構造や、制御関係、プログラミングなどについての講義はない。

選択必修として、7、8セメに特論という形で各自の専門をより一層深めるための講義が用意されている。

なお、数学の教員免許は無理なく取得できる。

モデルケースA参照

## 工学部 第2類 システム工学課程

システム工学課程は第2類電気系に属する課程で、ソフトウェア・ハードウェア両方について学ぶところである。数学については、ソフトウェア・ハードウェアを学ぶのに最低限必要である。解析学と、確率・統計学が用意されている。

ハードウェアに関しては、基礎から応用まで、各セメスターに講義と演習が振り分けられている。(ただし講義+演習の型ではない)

ソフトウェアに関する科目は、ハードウェアに関する科目と比べて内容が浅く、数理情報科学コースと比べると、数も少ない。しかし、システム工学課程は、ハードウェアを主として学んでいく所であるので、その条件を満たすには充分であろう。

その他、数理情報科学コースにはない講義に、工業関係の品質管理や、信頼性工学を学ぶ計数工学というものがある。

システム工学課程は、ハードウェアを中心に、それに必要な基礎的な数学や、ソフトウェアについて学ぶ所である。

モデルケースB参照

## 数理情報科学コース

2年次において、数学、ソフトウェア、ハードウェアそれぞれの基礎についての講義や演習を履習し、3年次に、各自の専門に応じて、数学系または情報系の科目を履習することになる。しかし、数学については、用意されている講義・演習数が少ないため、理学部数学科のように内容の濃い学習をすることはできない。数学を純粋に学びたい人は、理学部数学科へいくほうがよい。

情報系についてであるが、これはシステム工学課程の場合と逆で、ソフトウェアが中心である。ソフトウェアに関しては、基礎的なものから、人工知能やグラフィックスなどのかかなり専門的なものまで学ぶことができる。ハードウェアに関しては、ソフトウェアを学ぶうえで最低限必要な講義が開設されている。

モデルケースC参照

数理情報科学コースの展望

これまで、3つの学科のそれぞれのおおまかな内容と特色について述べてきた。それらをふまえて、総科における数理情報科学コースの問題点について考えてみようと思う。

近年、情報処理と、その他多くの分野との結びつきが深まってきている。あらゆるところでコンピューターが導入されるようになり、それを扱えることと同時に、それを動かすためのソフトウェアの開発が必要となってきている。

このソフトウェアの開発には、情報処理の専門知識だけでなく、ソフトウェアを使用する側の分野の専門知識も必要である。

工学部では、情報関係以外の分野が学べるのは一般教育科目ぐらいである。その点、数理情報科学コースでは、総科のカリキュラムを活かせば、幅広い知識を得ることができる。これが、総科における数理情報科学コースの存在理由のひとつであろう。

しかし、現在の状態では、学んでおいた方がよい専門科目が多すぎて、実際には、なかなか他コースの専門科目にまで手が回らないようである。他コースどころか、自コース内でも、数学と情報学との関連づけに苦心しているようで、総科の理念“複数の分野にまたがる研究”は、ここでも達成されていない。

情報処理は日々進歩している。この先このコースの重要性はいよいよ増してくるだろう。情報処理の専門を中心としながらも、他コースと密接に結びつき、総科内のネットワークとしての機能を果たしていったほしいものである。

(文責：森本 健 構成：山崎 明子)

時間割モデルケース比較表 ○=必修 ●=他コース

○=選択必修

△=要望科目

理学部数学科 モデルケースA

2年後期

	月	火	水	木	金	土
1	○解析学Ⅱ演習	休 実		○数学基礎研究		
2	○数学通論演習				○数学通論	英Ⅱ
3				○代数学	○解析学Ⅱ	
4		英Ⅱ		○原子物理学	○代数学演習	

3年前期

	月	火	水	木	金	土
1					○数理統計学演習	
2	○解析学A	○幾何学A演習	○計算数学	○数理統計学	○幾何学A	○計算数学演習
3			○解析学B		○代数学A	
4		○解析学B演習	○代数学A演習		○解析学A演習	

工学部第2類 システム工学課程モデルケースB

2年後期

	月	火	水	木	金	土
1	○応用統計学	△電気磁気学演習Ⅰ				○制御工学Ⅰ
2	○計算機概論	△電気計測	○数理計画法	○応用数学Ⅳ	○適応現象論	
3			○情報システム学実験Ⅰ		○応用数学Ⅲ	
4	△電気磁気学					

3年前期

	月	火	水	木	金	土
1	○電子回路Ⅰ		○情報工学Ⅰ	○電子計測		○通信工学Ⅰ
2	○システム工学Ⅰ	○計算工学Ⅰ		○応用確率論		○制御工学Ⅱ
3			○プログラミング言語			
4	○システム工学Ⅱ	○システム工学実験Ⅰ				

数理情報科学コース モデルケースC

2年後期

	月	火	水	木	金	土
1	体 実		○幾何学	○幾何学演習	○情報統計学	
2	○群論	○デジタル回路	○グラフ理論Ⅱ	○情報制御理論	○情報理論	○知識情報処理学
3	○群論演習	○現代思想	英Ⅱ	○プログラム言語	○計算機実験Ⅱ	
4	○コンピュータシステムⅠ	英Ⅱ		●基盤地質学		

3年前期

	月	火	水	木	金	土
1				●バイオメカニクス		
2	●砂防学		○計算理論	○計算機制御	○多変量解析	○応用統計学
3	○システムプログラム論		○計算機実験Ⅱ	○計画数学	●現代社会学	○外書講読Ⅰ
4	●パーソナリティ論					○確率過程論

授業科目対応表

注：○内はセメスター

工学システム工学課程

数理情報科学コース

理学部・数学科



<その他>

計数工学Ⅰ～Ⅲ⑤～⑦

知識情報処理学 ④  
 人工知能 ⑥  
 多変量解析, 時系列 ⑤⑥  
 計量生物学 ⑤  
 計算機統計学 ⑥

計算数学, 同演習  
 各専門分野の特論 ⑦⑧



# 戦え！ 自然環境研究コース

まずはじめに、筆者が自然環境研究コースに在籍していないことを断っておかねばならない。だからどうした、と言われたらどうしようもない。いくらでも謝るぞ。要するにこれは取材がうまく行かなかった場合、的はずれなものに終わった場合の言い訳なのである。

自然環境研究コースは、1987年度のコース改組によって設立された。この改組は、総科の理念の一つである「専門化、細分化されすぎた境界領域の打破」という精神にもとづいて時代の流れに合わなくなったコースに息を吹きこむために行われた。教授のみで改組の取り決めが行われたという勝手さはあるものの、その意気込みだけは評価してやろう。

で、現在のカリキュラムの有効性を調べるために、数人の自然環境研究コース生と、比較のため理学部生に時間割を聞いてみた。以下は、いずれも三年生の時間割の一例である。

総科A君の場合

	月	火	水	木	金	土
1	脳生理学		岩石組織学	超微形態学	海洋科学	
2	砂防学	集団力学	有機分析化学	天体物理学	法社会学	環境科学計測
3			外書講読		セミナー	
4	実験Ⅰ	実験Ⅱ				

理学部B君の場合

	月	火	水	木	金
1	分析化学	動物発生学	微生物学	物理実験法	無機化学
2		理科教育学概論	動物生理学	動物生態学	古生物学
3	青年心理学	動物発生学実験	動物生物学実験	動物生態学実験	動物形態学実験
4					

※土曜は休み。

まず、理学部の実験の多さが目につく。総科の2倍である。単純計算でいくと、理学部生は総科生よりも2倍、実験について詳しくなる。(単純すぎるが。) 実験についてさらに注目したいのは、例えば理学部B君の火曜日ならば3・4コマの実験と1コマ目の講義がつながりをもっていることだ。全ての曜日がそうである。形だけにしろ、これはすごい。総科では実現不可能なのだろうか。

で、総科の環境科学実験Ⅰ、Ⅱの内容であるがこれは総科らしいといえれば総科らしい。植生あり、気象あり、化学ありのなんでもこいやおっしゃったるで的なものとなっている。これで果たして頭に入るのだろうか。疑問が残る。

次に、総科の金曜3コマ(実際には4コマ目の後の5コマ目にやっている)、環境科学演習について。セミナーと呼ばれるもので、2年次からⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳと取っていく必修科目で。毎回演者が変わり、約半数は学部外から講演をしにやってくる。内容がなかなか高度で、ついてゆけない回もあるらしい。加えて演者間での話し合いや方向付けも行われておらず、これまた疑問が残る。

そして、最後に学際性についての疑問である。自然環境学という既存の学問領域をとり超える学問をしようというのなら、そのための方法論的な授業を設置するのは当然なのだが、現在それはない。その手はずを教えずして、学生にやれといってる人は責任を放棄しているのである。ちとら共通一次世代なんだ、受験勉強しかできねえんだよ悪いか文句あつかこの野郎。

— 以上のような疑問点を、自然環境研究コースの教官数人にぶつけてみた。

まず実験の少なさについては、少ないけど時間的・物理的にムリなのだそう。これは、各教官の受け持っている授業数が多すぎるのが大きく関係している。どこのコースについてでも言えることなのだが、教官が忙しい。一般教育科目が多すぎるのである。学生としては、一般教育科目の数が多い、バラエティーに富んでいるというのは素晴らしいことなのだが、忙しさを理由に内容の薄い授業をやってもらっては困る。文部省に言われてから変えようとする

るようじゃ遅いぜブラザー。

理学部の有機的なつながりをもつ実験については、性格が違う学部だから、という意見がでた。理学部はきまりきった手順にしたがってステップバイステップで学んでいく。が、総科は違う。どんな問題にも対応しうる学生を育てるべく、いきなり応用から入ってしまうのである。それは入口が広いことを示し、まず問題意識をもたせるのに役割を果たしているとのことである。なるほど。

セミナーについては、驚くべき事実が判明した。セミナーには教官や大学院生も講義を聞きに来るので、学外から来た演者などは対抗意識を燃やしていきおい気合の入った授業をくりひろげるのだそうだ。レベルが高くなるのも当然ではある。学生の勉学意識を高めるのには役立っているとのことだが、数回にわたってだけでもテーマをしばらくは必要は

あるように思われる。

最後に、「自然環境学方法論」のような授業の設立についてだが、なんと以前〜環境科学コースの頃にはそれが存在していたらしい。なくなった理由はレベルの低下、教える必要なしとのこと。しかし、何をどう勉強していいのかわからない学生が存在するのも事実である。ぜひ復活させてほしいものだ。

なお、研究の集大成である卒論については、別々な専門をもつ2人の教官に指導をうけ、学際性豊かな総科らしいものになっているようだ。例えば酸性雨の問題など、与えるテーマを複合領域的でアップ・トゥ・デイトなものにして工夫されている。が、そのための地ならしとでもいうべき3年次における個人研究などが用意されるとさらに良いのではなからうか。

(文責：竹内 憲司)

## あのさあ、物・生ってさあ…

ほとんど「文系人間」の私にとって物質生命科学コースというのは、“ぶっせい”(物生)の略からも理学部“ぶっせい”(物性)と似たようなものかとの先入観があった。むろん“物性”が何をやっている学科なのかよく知らないが…。

敵を知るにはまずおのれからだ、ということで、物質生命科学コースについて色々と調べてみる。

まず、ほとんどの総科1年生が参加する沼田合宿のために準備される、各教官の研究内容などを問うアンケートを見てみた。はっきり言って私はおどろいた。というのも、「卵〜初期胚の発生中に見られる局在タンパク質の機能の解明」という純生物といえるようなもの、「ステロイドホルモン生合成に関与する電子伝達系の反応」という生物物理化学の合成のもの、があったと思ったら「超流動や超伝導など量子凝縮状態のレーザー光散乱の研究」、「半導体物理、液体半導体、原子配列変化に応じて電子がどのように多様な振舞いをするか研究」といった、物理的で難しそうなもの、「天体物理学、主に低温度星の分光学的研究」、そして「新しいタイプの薬を開発する基礎研究」まで、実に様々な分野を研究する教官がいるからだ。

次に、何人かの物質生命科学コース所属の教官に話を聞いてみた。その話を総合すると、コース所属

の研究室には、物理学、化学、生物学がバランスよく組み合わせられているということだ。そして、生物系の研究室でも、理学部の生物学科よりミクロなレベルでの理解〜生命現象も分子レベルの構造とか電子状態、電子過程に結びつけて理解〜を目指しているということだ。このような方法は、他学部では、有難く、近代的で、世界の、時代の、最先端をつっぱしる、まさしく「世界にはばたく総科」だと思う。

ところで、理学部物性学科は?という、物理サイドの物質科学、つまり半導体、金属 etc. の研究が主ということである。また、上述の私の涙ぐましい調査により、物質生命科学コースは理学部の化学、生学両学科と共通点があるのではと瞬時思った。しかし、理学部両学科はあくまで概当の専門分野の研究であるので、物質生命科学コースとは、多少違うとやはり思った。

ということで、他学部と総合科学部物質生命科学コースをくらべようとするこじたい無理があると思うが、一応、理学部、物理物性化学生生物の4学科との1年次における数学理科の指定時間割をみてみよう。

ご存じの通り総科の理系志望者は、線代と基礎微積とあと2つの計4コマ分の数学理科がある。

よって、総科は物理物性両学科より圧倒的に指定

### 物理学科

	月	火	水	木	金	土
1	化学実験		一般化学			線代
2			専門	基礎物理		物理学概論
3					基礎微積	
4						

### 物性学科

	月	火	水	木	金	土
1	化学実験		一般化学			線代
2			専門	基礎物理		
3					基礎微積	
4			専門			

### 化学科

	月	火	水	木	金	土
1						
2			専門			基礎物理
3	基礎微積					
4						

生物学科 ( )は動物のみ < >は植物のみ

	月	火	水	木	金	土
1			(一般化学)	専門	(基礎物理)	
2	基礎微積				(地学実験)	
3						
4						

が少なく、また実験もない。また、生物学科は指定コマ数では同じだが、専門が早くも登場している。この辺のところ、総科は「広く浅く」なるのではないかとの疑問の発生する材料の1つになっているのかも知れない。だが、「狭く深く」か「浅いかも知れないが広い」のどちらかしか現実にはないと思う。(もちろん理想は広く深くだろうが…) この判断は相対的でしかないのだから、時代のニーズや人類の今日的課題を主に考えてみよう。やはり、求められ、活躍する人材というのは、幅広い関心をもて

たり、全体を見渡してバランス感覚をもって判断できたり、急激に変貌するニーズに絶えず、Up-to-date にフォローできたりすることであろう。そのためには、基礎力を関連した分野について備えた上で、全体を見渡し、ターゲットを定めたとき、それを実現すべく最も有効な深みのある取り組みをすることだろう。この時が、「深さ」の必要な時であろう。つまり、他学部のように、最初から自分の「穴」を決めてしまっ、わき目もふらずそれを掘り続けるのではなく、全体を見渡してここぞと納得できる「穴」を見つけた後に一生懸命掘り始める、これが総科の物質生命科学コースであろう。

さて、物質生命科学コースは、前述の通り、多様な研究室があるのだが、このことについて、多様な分野の寄り合い世帯では？との声があることに私は耳を傾けた。「生命」を反例に挙げさせてもらう。

生命現象の様々な機能は、それを担う生体物質の特異な構造や、機能を担う分子の存在に突き詰められることが多い。そうした物質の構造や分子の性質を調べることは、物質科学に他ならない。生命を離れた最も典型的な物質での構造と機能を研究することは、概念(考え方、手法)において、生命物質や機能分子の機能発現の機構の解明にもつながる。無論、物質の示す特異な機能の本能を一つ一つ明らかにすることはそれ自身重要である。つまり、考え方、手法、狙い、など、において、旧来の学問分野の分類では、物理学、化学、生物学といった領域の研究者が絶えず協力できることは、極めて強力である。

このように、旧来の学問分野を超えた研究室が数多く存在する総合科学部物質生命科学コースは、他学部と比較しがたいと思う。またそれが、総科のよさなのだろう。他学部と同じなら、わざわざこのような学部は必要ないわけだし…。

(文責：内田 知宏)



# 生体行動コースは、夜明けに涙を流す

生体行動科学コースは、行動科学、健康科学、生命科学を主とするものというように、コース内で3つの専攻に分かれている。ここでは、行動科学専攻に焦点を当て、教育学部心理学科との比較により、その特色や問題点を考えていってみたいと思う。

## ▶それぞれの履修内容

まず、教育学部心理学科は、実験心理学、学習心理学、社会心理学、教育心理学、発達心理学、臨床・障害心理学の6講座に、4年次に分かれる。またそれぞれの講座が開講している講義の中には、必ず必修単位が含まれている。昭和63年度生を例にとってみると、実験心理学8単位、学習心理学4単位、社会心理学4単位、教育心理学2単位、発達心理科4単位、臨床・障害心理学6単位の計28単位が必修単位となっており、それぞれの科目もきちんと指定してある。この28単位は、表1の履修細目の専門教育科目の心理学34単位のうちの大部分を占め、残りの6単位は選択必修となっている。その選択必修科目も指定された中から選択するようになっている。また、教育学4単位は、教育学科の授業科目のうちから履修することになっており、選択科目30単位は、教育学部及び他学部の授業科目のうちから履修することになっている。

次に、生体行動科学コース行動科学専攻は、3年後期から、生理心理学、社会心理学、臨床パーソナリティーのそれぞれの研究室に配属されることになっている。紙面の都合上、行動科学の履修細目を掲載することは省くが、学生便覧（昭和63年度）を参照した限りでは、心理学科のそれよりも複雑な印象を受ける。相違点を挙げてみると、まず、一般教育科目の自然分野8単位が選択必修になっている点。7系の科目のうちから4系以上、各系2単位以上と指定されている。また、一般教育科目の中に総合科目4単位が含まれる点も異なっている。外国語科目では、第1、2外国語共に6単位であり、専門科目の振替として外書講読2単位を含んでいる。また、専門教育科目では、行動科学に限らず、総合科学部全コースを通して特別研究6単位、現代思想2単位、プログラミング通論2単位が必修であり、コース内共通の必修としては外国語特別演習2単位が指定さ

れている。選択必修として、基礎実験で3単位以上、専門実験で4単位以上、生体行動科学コース選択必修科目群の中から32単位以上選択するようになっている。他学部の授業科目を8単位まで含むことが可能な自由選択は、30単位を履修するよう指定されている。選択必修科目群において、生体行動科学コースでは、行動科学の他に、生命科学や健康科学の授業科目も含まれているので、選択に幅があり、自由に選べると言えるだろう。しかし、それがかえって、系統だった履修の妨げとなり得るかもしれない。履修する側の学生本人の意志次第と言えるだろう。

## ▶時間割の比較

昭和63年度生の1年前期から3年前期までの時間割を、生体行動科学コース行動科学専攻のある学生と教育学部心理学科のある学生を例にとって比較してみることにする。

心理学科のほうは、1年次から心理学の専門授業が入ってくるのに対して、総科は2年次にコースが決定されるので、1年次は一般教育科目のみである。2年前期では、行動科学専攻のほうが、心理学科よりも専門講義が多いようだ。また、2年後期では、行動科学専攻のほうでは実験が週2回になっているが、心理学科では実験科目は見当たらない。

全体的に見て、心理学科では、教育心理学、発達心理学、臨床・障害心理学の授業科目が多く、それに対して、行動科学専攻のほうは実験科目が多く、生命系や社会系などの多岐にわたる分野の講義が見受けられる。

表1 <教育学部心理学科 履修細目>

履修内容	一般教育科目				外国語科目		保健体育科目		専門教育科目				合計
	人文分野	社会分野	自然分野	選択科目	第1外国語	第2外国語	理論	実技	心理学	教育学	選択科目	卒業論文	
必修単位数	8	8	8	12	8	4	2	2	34	4	30	8	128
	36				12		4		76				

表2 <時間割の比較>

教育学部心理学科

1年<前期>  専門授業

	月	火	水	木	金	土
1	統計学A		行動科学	英語	体育実技	日本文学
2	地学概論Ⅰ	哲学		日本国憲法	保健理論	英語
3	ドイツ語	社会学		心理学	心理学 研究法	
4		英語	ドイツ語			

<後期>

	月	火	水	木	金	土
1			行動科学	英語	体育実技	倫理学
2	地学概論Ⅱ	児童心理学		コンピューター プログラミング	教育学	英語
3	ドイツ語	社会学	政治学B	心理学	基礎実験	
4	適応理論	英語	ドイツ語		演習Ⅰ	

2年<前期>

	月	火	水	木	金	土
1			英語	古代中世 国文学講義	国語学講義Ⅲ	
2	教育原理Ⅰ	英語		中国古代 中世思想史	心理 統計法Ⅰ	
3	教育心理学 演習Ⅰ	体育実技	適応理論	中国文学 演習Ⅰ	基礎実験	
4	現代日本 文学概論	戦争と平和 に関する総合 的考察	基礎書道	ヨーロッパ とは何か	演習Ⅱ	

<後期>

	月	火	水	木	金	土
1					実験心理学 演習	
2	情報処理 演習			学習心理学	社会心理学	
3	教育心理学			心理統計法Ⅱ	障害心理学	
4	教育原理Ⅱ				心理検査Ⅰ	

総合科学部生体行動科学コース行動科学専攻

1年<前期>

	月	火	水	木	金	土
1		統計学B	行動科学	情報学		一般地学Ⅰ
2		哲学	英語 表現法Ⅰ	日本国憲法	細胞 生物学A	日本文学
3	英語		中国語	英語会話 演習Ⅰ	中国語	
4	中国文学 特演Ⅰ	体育実技		ヨーロッパ とは何か		

<後期>

	月	火	水	木	金	土
1		統計学B	行動科学		生態学	一般地学Ⅱ
2			英語 表現法Ⅰ	保健理論	細胞 生物学B	日本文学
3	英語	社会科学 基礎論	中国語	英語会話 演習Ⅰ	中国語	
4	中国文学 特演Ⅰ	体育実技		ヨーロッパ とは何か		

2年<前期>

	月	火	水	木	金	土
1	行動生物学	地域 開発論Ⅱ	筋生理学	総合言語理論	統計学序説	心理学
2	植物系統学	集団力学	社会調査法	中国語読解法 演習Ⅰ	運動行動論	基礎実験
3	日本古典 文学研究	体育実技	英語	現代社会学Ⅰ	プログラミ ング通論	
4	現代政治学	英語	基礎書道	比較哲学A	社会動態論 演習Ⅰ	

<後期>

	月	火	水	木	金	土
1	行動生物学	教育心理学	生物学	細胞生物学		行動科学
2	神経生理学	リーダーシ ップ論	基礎実験	異常行動論	人間関係論	実習
3	学習心理学	現代思想	英語	精神生理学	動物系統学	
4		英語		比較宗教学	社会 動態論Ⅲ	

3年〈前期〉

	月	火	水	木	金	土
1				実験心理学		実験演習Ⅰ
2		発達心理学	動物心理学	集団心理学	臨床心理学	
3	青年心理学	家族心理学		学習心理学 演習	社会心理学 演習	
4					精神医学	

〈前期〉

	月	火	水	木	金	土
1	脳生理学	生体情報論	行動科学 外書講読Ⅰ			
2	集団組織論	生理心理学	心理療法	行動制御論	集合行動論	人間工学
3	行動科学	健康科学 実験	社会行動論	実験人格 心理学		
4	実験		実験			

### ▶今、何が問題か

生体行動科学コース行動科学専攻の3年次学生にアンケート調査を行ったところによると、大学入学以前から心理学を専攻しようと思っていた人と、入学後つまり大学1年生の間に決定した人は、だいたい半数ずつぐらいであった。入学以前から心理学を志望していた人に対して、教育学部心理学科について考えなかったかどうか質問してみると、ほとんどの人が考えなかったと回答した。その理由としては、教育関係に進むつもりがなかったということが主なものであり、次にその他になりたいこともあり選択の余地を残したかったという理由が多かった。その他としては、2次試験の受験科目が2教科でよかったため、科学的な実験が多そうだったから、臨床分野などの偏ったものではなく幅広い分野が学べそうだったから、総科は新境地というイメージで、何かおもしろいことができそうだったから、という理由が挙げられる。

また、総科の行動科学のカリキュラムについて質問したところによると、良い点としては、あらゆる範囲から話がきける、行動専攻以外の人と授業を受

けることでまた違った見方ができる、勉強を自分から進んでするほうではないのでこのカリキュラムはよいということが挙げられた。改善してほしい点としては、もっと早く2年の前期から心理学の基礎的なことを教えてほしいという意見が多かった。具体的には、概論（一般教育よりもちょっと高度）、心理関係の統計解析の授業を入れてほしいということだった。また、興味がわく前に日々のノルマが多すぎて、少しもそこから深めていこうという気がなくなるという声も多かった。

心理学科の学生も、2年次にもっと専門を増やしてほしいという意見があった。2年次を見る限り、総科のほうが専門が多いのだが、生命、社会、数理などに科目が分散し、系統だった講義を受けている意識が薄いのではないだろうか。もっと授業間につながりを持たせた基礎的な講義を増やしてほしいということが主な意見ではないだろうか。

実験、実習が多いのが行動科学専攻の特色だが、それを支える基礎的知識を充実させる講義が、今必要とされているのではないだろうか。

（文責：小松 千尋）

### 〈取材を終えて〉

“学際性”をテーマに各コースを追ってきたわけですが、広くかつ浅いという総科の特長、問題点がどのコースにも少なからず現れていた観があります。今回の特集が教官方、学生ともどもに専門と学際性とのかねあいを考える一つの契機になれば、と思っています。

比較に終わったとも言える今日の特集を踏まえて次号は一步踏み込んだものを予定しています。御意見・感想・注文のある方、身近な編集委員へ…。



## 新任紹介

外国語コース  
中国語講座

三木直大  
(み き なお たけ)



その昔、大阪で予備校通いをしていたころ、たまたま漢文の先生と親しくなりました。その先生は関大学院生で、アルバイトで予備校で教えていました。いまはある大学の先生ですが、その先生のお話のなかに、「中国についての研究はまだ未開拓の領域が多いし、これは哲学だとか文学だとか歴史だとかいうように分野にそんなにこだわらなくてもいいからおもしろいよ」という話がありました。それがぼくが中国文学を勉強しはじめたきっかけでした。でもずいぶん悩みもありました。今から考えるとかわいらしいのですが、史書のなかに、人を食べる話がでてきたりすると、どうしてそんな国の文学なんてやらないといけないのだろうかなんて思ったこともありました。それをヨーロッパでもカニバリズムというのがあってべつに中国だけの話ではないとか、中国にも魯迅という文学者がいてそれを批判しているとか、それから食欲の極みは食人だという開高健の「最後の晩餐」にへんにうなづいてみたりとかしながら今日にいたったというわけで4月1日づけで、外国語コース中国語講座に着任しました三木直大と申します。現在は中国の現代の文学を専門に研究しておりますが、作品を何故か欧米の文学作品と比較して考えてみたりするのも、そういう昔の影響があるのかもしれない。研究室は少々離れた辺鄙なところがありますが、近くには学生控室もあることであり、気がむいたらお訪ね下さい。新世界同様の広島です。よろしくお願いたします。

自然環境研究コース

児子修司  
(に こ しゅう じ)



大阪生まれ、大阪と東京で長じ昭和54年広島大学理学部入学。その後、大学院生及び特別研究員としての東京大学時代を経て、今春本学助手を仰せつかった。専門は地質学、古生物学。古生代の非変成堆積岩類と直錐殻頭足類を調べているので、今から数億年前の地球の自然環境を研究していることになる。

私はこれまで研究者養成機関において、自己の研究能力を高めることを学んできた。よって、教育者としては未熟である。教官と言うよりむしろ、地質、岩石、化石のわかる先輩くらいに考えていただければよい。趣味は園芸。特に、中米の亜高山帯に自生するリカステ類やマダガスカル産のアングレカム類のラン科植物を愛でている。スポーツとアルコールは全くだめ。A.K. ル・グインを好む。要するに面白味のある人間ではない。信条は「ほっといてくれ。」

## 学生相談室

大河内 浩 人  
(おおこうち ひろ と)



この4月より学生相談室に勤務しています。3月までは同じ総科の大学院（生物圏科学研究科）のLavatoryのように狭いLaboratoryで丸5年、若い男の子の指の温度を調べるかたわら、臨床心理学の研修を受けてきました。私、かねてより「保健室のおじさん」になりたいと思っており、学部時代には養護教諭の資格をとろうかと真剣に考えたこともありました。実際、千葉大の教育学部でしたので、全く非現実的な話でもなかったのです。そのようなわけで、それにかなり類似した現在の環境に大変満足しているところです。

さて、これまで1度も学生相談室を訪れたことのない方も多いでしょうし、その存在自体御存知ない方も少なくないでしょうから、この場を借りて少し紹介させていただきます。学生相談室はプレハブ3号棟の2階にあり、月～金9：00～17：00、土9：00～12：30の間、開いております。時間割のくみかたや勉強のしかたから対人的なトラブルや性格上の悩みまでなんでも受けつけております。「保健室のおじさん」に会いに行くような感じで、どうぞお気軽にご利用ください。

## 地域文化コース アジア研究

高 谷 紀 夫  
(たか たに みち お)



フィールドワークなるものを始めてかれこれ15年ほどになる。この文化人類学の基本的作業は、つねに新しい世界、新しい人との出会いが出発点である。だがその出会いはいつも順調に滑り出したわけではない。不信感、邪魔者扱いの視線を感じることも幾度か、当地の人々にとっては闖入者でしかない自分をいかに受け入れてもらえるかに心を砕いたことも少なくない。

新しい世界に入る時、誰もが緊張感とともに、自分の適応力をいぶかる時期を通過する。総合科学部に籍をおいて間もない私は「慣れましたか？」と問われるたびに、苦笑いしながら自分の適応力に「じれったい！」と感じてしまう。フィールドワークの経験でそれなりに場数を踏んでいるけれども、さほど関係はない。いわば人間関係において、プロにはなっていないのである。こう告白すると自覚と精進が足りないとお叱りを受けるかもしれない。だがむしろその出会いでの粗忽さを大事にしたいとも思う。プロとしての精進と平行して、アマチュアとしての独自の鋭い感受性も尊重したいのである。

プロというのは「ある一定レベルの成果をつねに提出できること」と考える。そのための努力は並大抵ではないだろうが、やりがいのあることであり、プロ意識と自分の生き方を重ねあわせようと奮闘中である。しかしながらその一方でアマチュアリズムの精神も忘れたくない。プロであると同時に知識を広範にかつ貪欲に吸収するオールラウンド素人でありたい、そう願ういささか欲ばりな私である。

さらなる出会いを求めて、つねに動的な姿勢をくずさずいたいとも思う。時には立ち止まって自分の位置を

確かめ、周囲の状況を静観する充電期も必要だろう。だが今はつい安易にはしりがちな自分を戒める意味でも、動きながら考えることを旨としたのである。

フィールドで心がけるのはその出会いを一過性のものにするのではなく、長いつきあいの端緒とすることである。フィールドワークの成功如何は、時間をおいて再訪した時の相手の態度で自ずと知れる。「じれったい！」適応のための過渡期であるがゆえの心情である。長いおつきあいどうかよろしく。

地域文化コース  
ヨーロッパ研究

木 幡 藤 子  
(こ はた ふじ こ)



新しい土地での新しい仕事に追われ無我夢中に生活していると、昔の同じような経験がふと思い出される。私が新しい生活を最初に経験したのは大学生になった時だった。関西の私立の女子校での中学・高校の6年間は、制服もなく、校則があるのかどうかとも知らないほど校風は自由で、小説に読み耽る時間もあり楽しかった。しかし花嫁学校として誉れ高かったその大学には行くまいと決心して抜け出したのが東京の国際基督教大学だった。中学・高校とミッションスクールにいた時は、小説の方が聖書よりはるかに人生に近いと思っていたが、大学1年生の時キリスト者になり、転科も可能だったので、人文科学科で聖書の勉強をしようと思った。そこでは多くの先生や友人に出会い、学問の香りもかいだ。大学院は旧約聖書研究の第一人者がおられた東京教育大学の言語学科に進んだ。——ドイツでは昔の大学の伝統の名残りで神学部が今でも大きな顔をしているが、日本の国公立大学で聖書学は色々な所に配属されている、例えばヨーロッパ研究という具合にその先生、今やお年を召し優しくなられたが、当時は時々雷を落され、こわかったし「こんな専門をしても将来職はありませんよ」と公言されていた。それでも数人の大学院生がついていたのだから今から考えると不思議なものである。その先生の言葉通り大学院を終えても就職の見込みがなかったので、ドイツへの留学試験にパスした時、それで2年ほどは食べていける事が一番うれしかった。しかし、いざ出発が近づくと大変心細くなり、大きな不安を抱いての旅立ちだった。ドイツでは当初、自分の意見をはっきり主張する事を身につけるのに苦労したが、奨学金の延長がどんどん続き、まわりの学生のように暮らしていれば倍の年限は生活出来たので、結局学位論文の出版の仕事も済ませ帰国したときには、もうすぐ丸10年になるという歳月が経っていた。留学生活は、専門の研究以外にもドイツ語を少しは自分のものとし、多くのドイツ人や外国人留学生と知り合いになり、バッハの音楽を好きになりと大変充実していた。その後西宮の両親の所に居候し、4大学5学部で3年間非常勤講師を勤め、1990年4月にこちらに来たのである。

広島での生活はどのようなものになるのかしらと今思っている。



## 社会文化研究

### 奥村和久

(おくむらかずひさ)



京都からきた奥村といいます。生まれは名古屋ですので、西へ、西へと移動したかたちになっています。市内に限られていたとはいえ両親が縁を求める引っ越し魔でしたし、僕自身も下宿を点々としてきましたので、どこでも住めば都とばかりにすぐにその地に馴染めるよになってきました。そのうえ、広島は都市機能を備えつつも、海と山に囲まれたのどかな地ですので、のんびりした僕にとっては暮しやすい所ようです。ちなみに、海産物とお酒は僕の好物です。

研究も住居と同様にいろいろ変遷を重ねてきています。最初は経済学史上の様々な人物による世界市場認識の検討を行っていましたが、現在は主として現代のフランス・ECの産業・貿易構造に関する実証分析をしています。その際に、なるべく世界経済の構図と重ね合わせながら、日本・アジア、アメリカ等と比較しつつ考えたいと思っています。また、今まではモノにかかわる分析が中心でしたので、今後はサービス、カネをも射程にいられた検討を行うつもりです。こうした作業と平行して、目下のところ、現代世界経済把握に関する理論研究（レギュレーション理論と世界システム論と呼ばれているものの折衷）に翻訳に追われています。実証を積み重ねる中で小さくともなんらかの傾向を見いだそうとする作業と、大きなパースペクティブをもった理論研究との接点を求めていくことも、将来の課題としていきたいと思っています。

まだ、半期制やら100分授業やらで戸惑うことも多く、いろいろ迷惑をかけているかとは思いますが、よろしく願います。ニック・ネームはピンク・パンサーで、研究室はP2-209です。いつでも気軽に訪ねてください。

## 外国語コース 英語講座

### 飯田操

(いいだみさお)



『リア王』は、シェイクスピアの四大悲劇のなかでも、最も悲惨な結末をもち、長い間その結末をハッピーエンディングにした改作版が上演されつづけられた程です。ほとんど全ての者の死に終わるこの悲劇は、劇冒頭、引退を決意した老王が、3人の娘たちに自分を如何に愛しているかを述べさせ、その言葉に応じて王国を分け与えるという言葉に端を発します。これに応じて姉妹2人は父への愛情を如才ない、美しい言葉で語りますが、末の娘コーデリアは、ただ「何もございません」(“Nothing, my lord.”)とのみ答えます。その意外な言葉に言い直しを迫るリアに彼女は、なおも“Nothing”という言葉を繰り返します。この言葉はコーデリアの素直な愛情表現でもあるのですが、これを理解できないリアは逆上し、コーデリアを追放し、やがて美辞麗句によって王国を二分した姉達の裏切りに遭い、その悲惨が始まるのはご存じの通りです。

力のあるもののこの戯れ、あるいは老いて幼児化したこの王の甘えの言葉を許さず姉達のように父に対する



愛情を表現しないで沈黙するコーデリアには、コールリッジが言ったように、姉達に対する嫌悪と自分の正しさを誇るところ、そして父の言葉に含まれる不条理に対する不機嫌のようなものが含まれており、かたくなで、幼さ、わがままさ、そして愚かさがないとは言えません。

しかし、その後の眼を覆いたくなるようなリアの苦悩と悲慘を通して語られるのは、コーデリアの“Nothing”という言葉に代表される真実の言葉、真心の大切さです。この劇の最後の台詞に含まれる「言うべきことではなく、感じていることを語る」(“Speak what we feel, not what we ought to say.”)という言葉には、この劇の最も大きな主張が述べられていると言えます。

原稿の締切が迫り、自分自身を語ることなど最も苦手な私は、ここでも自分自身の研究対象であるシェイクスピアに頼りました。自分自身の言葉で語らない卑怯は否めませんが、これが最も率直に自分自身を語る方法であるように思えます。「言うべきことではなく、感じたことを語る」ことを心がけたいと思います。

## 外国語コース 英語講座

白井雅美  
(うす い まさ み)



この3月に、アメリカから3年半ぶりに帰国し、4月に広島へ参りました。神戸で生まれ育ち、一時鎌倉に住み、中学時代よりずっと西宮で、両親は今も西宮にいます。広島は、はじめてで、少しカルチャー・ショックに陥っています。

神戸女学院大学、関西学院大学、ミシガン州立大学を渡り歩き、英米文学専攻で、学士号、修士号、M.A. Ph. D をいただきました。留学中は、イギリスで演劇のコースを取ったり、ヨーロッパをバック・パッキングでひとり旅をしたり、アメリカ各地を放浪し、ついでに学会発表もしました。また、ミシガンでは助手で働いていた時に、教育学部副学長を行政腐敗とレイシャル・ハラスメントで訴え、オンブズマンの助けをかり、勝ってしまったり、卒業後は帰国までの半年間、同大学の客員研究員になったりしました。

学部生の時以来、ヴァージニア・ウルフに傾倒し、女学院でフェミニズムの洗礼を受け、アメリカでさらに練きをかけました。フェミニスト批評の正しい解釈を紹介したいと思います。また、英詩詩作の方もしていて、アメリカでは作家会議にも出席し、そこで知り合った多くの作家・詩人も紹介したいと思います。

趣味は限りなくありますが、現在の制限ある生活の中では、テニスと園芸(草花、観葉植物、野菜とハーブ)ぐらいしかできません。スポーツは大好きで、スキー、ヨット、車、山登りもします。あと、自分の服を縫ったり、小物を作ったり、お菓子やパンを焼いたり、絵をかいたり、ピアノを弾いたり、生花をすることが好きです。広島は、野菜や魚がおいしいので、今煮物等に凝っています。大学へは、お弁当持参で来ています。

現在は、教養の英語を担当していますので、いろいろな学部の1、2年生の人たちといっしょに勉強しています。人数が多いクラスばかりなので、なかなかクラスの人たちと親しくなることができなくて残念ですが、徐々にネット・ワークを広げてゆきたいと思います。未熟ですが、どうぞよろしくお願い致します。

生体行動科学コース  
保健体育講座

笠井達哉  
(かさい たつや)



この4月に着任して1月余り。公私共に少し余裕ができ、いま自分が置かれている状況を客観的に分析しているところです。話と現実には常に食い違うもの（例えば、移転が1年延びたこと等）。その食い違いを、いかに自分の仕事にプラスに出来るかがそのヒトの能力。この私の信念から、今なにをすべきか、何が出来るか、どうすべきかを模索中です。そういう私の仕事（仕事というより関心事と言ったほうが当たっている）とは、「随意運動（特にヒト）の運動神経生理学的メカニズムの解析」です。と言えは格好いいのですが、簡単に言えばヒトは練習（経験）をすれば、どうして上手に運動が出来るようになるのだろうか、という素朴な疑問に科学的に答えたいということです。と言えは、「そんなだいそれたことを。自分の能力を弁えて、分を考えろ。ばかも休み休みいえ。」との声が聞こえてきそうですが、私の脳は生まれ落ちる前から細胞分裂の回数が少なかったためか、はたまた、いつのときか神経回路の形成に決定的欠陥があったのか、原因はさだかではないものの、ごくごくシンプルに出来上がっており、一度こうしたいと思う神経回路が活動を始めると、他のことに働く神経回路の余裕はもうないようで、融通が利きません。そんなわけで、ここ10数年来上記の関心事に心を奪われて来たわけですが、1990年代は「脳」の時代と言われますが、その一端を担いたいという「希望（夢）」が私の精神的背景です。現実離れした「夢」で生きていることも、私の脳が単純化している証拠でしょうか。なにはともあれ、棺桶に横たわるまで自分の夢を追い求める人生でありたいとの願いで、ここ広島の地に赴任してきました。

最後に、学生諸君に対する希望を記して、新任の挨拶とします。それは、自分の個性（能力）を早く見つけて、それに磨きをかけて欲しいということです。これは、教育の根本理念として古から言われてきたことですが、その本当の意味を理解して欲しいということです。すなわち、自分の能力に磨きをかけるといっても、世界で通用するように磨きをかけるということです。若い諸君は我々と違って（私達は世界に追い付け・追い越せで、日本の全体のレベル・アップが急務だった。したがって、国内でみんなが競いあうことに意味があった）、これからの日本を世界のリーダーにすべく、目は常に世界に注がれていなければならないからです。そして、諸外国と対等以上につき合うには、個人がどのような能力（あることに対するプロとしての能力）を持っているかが決定的に重要だからです。もうおわかりでしょう。いままで求められていたような、平均的で何でも器用にこなせる優等生（私はこれをセミ・プロと呼ぶ。決してプロではない）は必要ないということです。すなわち、自分は何のプロになりたいのかを常に考えて学生生活を送って欲しいということです。

## 地域文化コース

### 日本研究

柳澤浩哉

(やなぎさわ ひろ や)



4月から日本研究講座にお世話になっている柳澤です。私は、留学生の日本語教育を担当していますが、専攻は、日本語教育、国語教育、西洋修辞学の3つです。特に、西洋修辞学を応用した作文教授法の開発が研究の中心ですが、最近では議論法に興味を持っています。

日本ではほとんど知られていませんが、議論にも将棋や囲碁と同じように定石があり、禁じ手（虚偽）があります。つまり、議論と定石と虚偽をマスターするだけで、議論の力は格段に進歩するわけです。西洋修辞学では、議論の定石と虚偽の体系化を行っており、虚偽についての整理は、現在、ほぼ完成しています。しかし、定石についてはまだ研究途上で、教授内容として使えるまでに整理されていません。私はこれらを整理し、最終的には問題集としてまとめてみたいと思っています。つまり、「この本を一冊解けば、あなたも議論に強くなる」問題集です。こう書くと「そんな本、本当に出来るのかいな？」と思われるかもしれませんがその議論の定石を、

説得→それに対する反論

というパターンにまとめると30~100種類程度にまとめられます。(西洋修辞学ではこれらをトポスと呼びます。) それらを、300程度の具体例と500問程度の練習問題で覚えるという形をとれば結構、実現可能なのではないかと思います。現在は、これがどの程度有効か、私の講義の中で実験中です。(現在「議論法」と称する本は多数出版されていますが、いずれも議論の心構えが書いてあるだけなので、読んでも議論は強くなりません。議論を強くするのは具体例だけです。)

例を一つ示しましょう。「美人は三日見れば飽きる。ブスは三日見れば慣れる。だから、結婚相手を顔で選んではいけない。」→「しかし、慣れることと、好きになることは違います。ゴミ集めを三日もやれば慣れるでしょうが、ゴミを好きにはなれないでしょう。」(少々過激な例ですが、これは、「統合と分割」と呼ばれるトポスを使った反論で、反論としても妥当です。

## T.ネール ガーランド



A number of people, both here and in the United States, have asked why I wanted to come to Japan. There are many specific reasons, but most of them can be summarized in one short answer: To learn.

My interest in Japan began in my high school days, when I read books about this country and talked with people who had lived here. What I read and heard was very intriguing. In recent years I decided that I wanted to experience Japan first-hand, rather than through the pages of books and the accounts told by other, so

I began searching for a way to spend an extended period of time here. The Fulbright program has graciously provided that opportunity, so here I am.

Now that I am here, what am I learning? Among other things, I am learning that teaching at a Japanese university, while different in many respects from teaching at an American university, is a delightful and rewarding experience. Students are indeed--as I had read--extremely quiet and polite in the classroom. In conversations outside the classroom, however, they are very warm and friendly. They ask questions, they share their thoughts and feelings, and they are not afraid to express their opinions. I am extremely happy that they are willing to do these things, for they are teaching me more about Japanese life than I could learn from stacks of books.

There are, course, many things which one simply cannot learn from books. One of these things is what Americans would call the gut-level feeling of being Japanese. As a visitor I can only guess at what this is really like, but I do get the feeling that most of the people I have met here truly enjoy being Japanese. When I watch the students on the campus, or the crowds in the shopping areas and on the busy sidewalks, I see many smiling faces and hear many happy-sounding conversations. The people I have talked with about this feel strongly that in spite of certain annoyances that are inherent in Japanese life (like the crowded living conditions, the traffic congestion, and the high cost of everything), life in Japan is basically good and they are happy to be a part of it. There seems to be a certain sense of "belongingness" and of personal security that accompanies being Japanese. I am not sure to what extent the same kind of feeling exists among Americans in regard to their country, for Americans seem to be preoccupied with searching for an answer to the question "Who am I?" In Japan, I think that question is less likely to be an all-consuming issue for most people, because for most the answer is obvious: Who am I? I am a Japanese, of course.

Obviously, I have many things to learn about Japanese life. I am thoroughly enjoying this opportunity to do so. Thus far, my being in Japan has brought to mind only two things that I don't like. The first is I don't like the fact that I will be here for such a short period of time. The second is I don't like the fact that didn't come sooner.



## 研究室のことなど

根平邦人

本年度（平成2年）は、特別研究（卒論）として次のような内容を学生に提示した。

コケ植物の生活史・繁殖・発生・進化

森林と森林植物の種生物学及び生態学

植生の分布パターン及び種保全に関する景観生態学

環境指標植物の比較生物学

そして私の研究室にきた学生は、それぞれ関係ある教官と相談し、自分の希望をとり入れ、目下研究にはげんでいる。それらは「植生（ブナ林）の多様性と環境要因との関係」「絶滅危惧植物の種生態とその環境保全」などといった内容である。

もともと私は、コケ植物を材料にしてその発生や進化の問題を考えてきたが、大学改革の波で、教養部が改組されて総合科学部になった時点で、私の研究内容も幾分変更せざるを得なくなった。私は自然環境研究講座に属し、環境科学コースで学生を教育していかなばならぬ。元来、野外好きであったので、この際とばかり生態のほうに力点を置いて研究をしてゆくことにした。これまでの自分の植物学の知識を生かしつつ、環境科学に貢献できるものはなにか。環境科学そのものの定義もあいまいなまま、私は、このことを真剣に考え、その結果到達したのが人間周辺の植物たちの生態の実態をつかもうとすることであった。すなわち都市生態系の植物の動態である。

このようにして私は広島市をはじめとする市街地のタンポポ分布の調査を試みた。そして最初の卒論生にもタンポポの環境指標性というテーマをあたえた。この問題は意外と面白く、私たちの成果を真似て全国各地でタンポポ調査が盛んになった。その後数年間、このテーマを継続するとともに、研究室では、埋め立て地の雑草の生態学や都市化の指標としての帰化植物の研究を展開していった。

そのうちに、江田島で1000haもの山林が焼失するという大きな事件が発生した。わが自然環境研究講座の教官は力を合わせ、山火事跡地の総合研究をすることに意見が一致し、様々なかたちで研究プロジェクトがくまられたのである。私も当然ながら、これに加わるようになった。もともと環境科学を真剣にやっとうと意欲的で、活力に充ちた先生方の集団である。このプロジェクト研究は極めてスムーズに運ばれていった。私の研究室でも学生諸君に手伝ってもらって、その結果をできるだけ早く発表するよう心掛けた。山火事跡地の植生の回復状態、それら植物の振舞などを、多くの手法を駆使して追究していった。それらの結果は国際的にも注目の的となっていった。

一方、熱帯林保全がさげばれる時代になり、それと関連して亜熱帯、熱帯の沿岸部に生育しているマングローブ林を調査する機会もおとずれた。沖縄からきた大学院生が私たちの研究室にいたこともあって、こちらの仕事にも精をだすことになる。そして、マングローブ林構成種の繁殖を中心課題とした研究を展開していった。これらの成果は、「マングローブ植物の種生物学的研究」として、とくに植物学会で発表してきている。

「都市生態系の植物」「山火事跡地の植生」「マングローブ」というように私たちの研究室の主なテーマを紹介してきたが、現在最も力を入れている課題は、「人間をとりまく植生の景観生態学的研究」である。これは、いわば人間——生態系科学とでもいえる学際的領域のもので、今後の発展が大いに期待される分野といえる。

このようにみえてくると、研究室の方針が一点に定まらず、分散していてなにかつかみどころがないようにみえるであろうが、それはそれでいい。要は、学生は研究室にはいったら、与えられたテーマをしっかりと考え、がむしゃらに前に進むだけである。研究は、苦しいことのほうが多い。しかし、厳しくトレーニングされ、きっちりと研究方法をマスターすれば、それなりの成果が生まれる。その結果が独創的であればなおよい。研究はクラブ活動ではない。評論家で終わってはならない。苦しみのおとには、必ず喜びがまっている。それは自分の研究結果が印刷され公表されたときである。私はこんな気持ちで研究室の諸君を見守っている。

私は、最初手掛けた「コケ植物の発生」を捨てて、上記のような生態学的な研究に力を置くようになった。

が、「コケ」と「進化」へのこだわりはいまでもまだある。この方面の文献は一応目をとおし、この問題についてのレポートも時々書いている。また、ほそぼそとではあるが、大学構内やブナ林ではコケ植物の繁殖についての野外実験を継続中である。やがては、若い諸君と一緒にやってきた生態学的研究と進化の問題とが、がっちりと結びついていくものと思う。

## 研究室紹介

数理情報科学コース  
正法地 孝 雄

あなたは、遅れてしまったレポートを提出するため自然科学棟5階の正法地研究室へと足を運んだ。ドアをノックして中に入る。掃除が行き届き、見事に整理整頓されている、とはお世辞にも言えない<sup>(1)</sup>。あたりをみまわすと、狭い部屋に5～6人の人間がひしめいている<sup>(2)</sup>。左側では、パソコンのキーボードをすごい勢いで打っている。何だかわからないが、何かのプログラムのようなのだ<sup>(3)</sup>。右側の人は一心不乱にマウスを操作している。何だか良くわからないがゲームをしているような気がする<sup>(4)</sup>。奥の方ではノートを取りながら難しそうな本を読んでいる<sup>(5)</sup>。ここであなたは我に返る。そうだ、あなたはレポートを提出しに来たのである。正法地先生は、と見ると電話をしている<sup>(6)</sup>。なかなか終わりそうにない。まだ終わらない。終わったようである。あなたは先生に声をかける。「あのう、レポート持ってきたんですが」と大きな声でどやされる。「何な、お前はノドこの誰だか名を名乗れっ（広島弁のイントネーションで）」<sup>(7)</sup>あなたは一瞬絶句するものの気を取り直し、返事をしようとする。ところがここでまた電話が鳴るのである<sup>(8)</sup>。先はまだ長そうだ<sup>(9)</sup>。

注1) 現在のところ男性ばかりである、掃除をしようなどという殊勝な人はいないし、ましてやいくら勉強していてもコーヒーなど出て来る筈もない。

注2) 先生を含めて6名の人間がいる。

注3) 先生のご専門は生物統計学である。この研究室の統計の特徴はデータ解析が多いことだ。しかも自前でデータを集めたりしている。これは大学の統計の研究室にしては珍しいということだ。ゆえに常に誰かがパソコンでデータをいじくっている。

注4) 本当にゲームをしているのである。新しく研究室に入ってきた学生にはまずゲームをやらせることになっている。そうすることで早く機械に慣れることができるらしいが、慣れた後もやってしまうという弊害もある。なぜか家庭用のゲーム機まである。

注5) 理屈も当然しなくてはいけない。理屈とは正法地先生用語で統計理論のこと。外にもオモチャ(=パソコン)などがある。

注6) 非常に電話が多い。

注7) 先生の豪快な広島弁(呉弁という説もある)は一度でも先生の授業を取ったことのある方なら皆御存じであろう。

注8) 本当に電話が多い。先生の目下の悩みは電話と来客と会議が多くて、学校にいと勉強ができないことだそうだ。

注9) なお、このように研究室にレポートも持ってきても受け付けてもらえません。レポートは講義の時に出示しましょう。

私の研究分野は簡単には説明しがたく、しかも顧みられることの稀な分野であると言ってよいであろう。というのも、それは哲学と音楽とが交錯する問題領域であり、現代とは考え方が根本的に異なっていた古代の音楽論であるからである。

話をもう少し具体的にすると、私が研究しているのは、西洋古代（と中世）の音楽論と中国古代の音楽論である（ここで「音楽論」とは、音階やリズムについて論じている狭義の音楽理論だけではなく、「音楽とは何か」あるいは「音楽はいかにあるべきか」を論じている著作を指す）。現代では音楽を専門の対象領域とする「音楽学」という学問の分野が確立されているのに対して、古代においてはそのような学問は存せず、音楽の問題は哲学者によって論じられるのが普通であった。

哲学と音楽。一方は抽象的な思索であり、他方は歌ったり楽器を奏でることによる身体を通じての営みであり、この両者は何らの関連も持たないように見える。しかしながら、古代においては音楽は以下の二つの理由で哲学の問題として取り上げるに値するものと考えられていた。

まず第一に、音楽は人間の心に直に触れることが出来、人間の心のあり方に大きな影響力を持っているからである。音楽を聴くことそれ自体が既に人に快楽を齎すが、音楽は人を感動させ、陶酔させ、あるいは熱狂的にする。だが、直接的な影響力が大きい故に、音楽は用い方次第では人間の心を倫理的に墜落させる危険性を孕んでいる。従って、古代のギリシアではプラトンやアリストテレスらによって理想の国家における若者の教育と関連して音楽の問題が論じられ、また古代の中国では儒学的な「礼楽」の思想に基づいて人民教化の手段として音楽の問題が論じられたのである。

音楽を純粋に美的に捉える傾向のある現代の我々にとっては、音楽を倫理的な問題と関連させることは抵抗があるであろう。しかし、音楽が感情や気分の面で影響を及ぼすことは今日でも否定し難い事実であり、このことは今日的な意味での情操教育や音楽療法との関わりばかりでなく、それ以上のある形而上学的な問題を暗示している。即ち、我々は日常生活においては言語を用い、言語化・概念化された世界に住んでいるが、音楽は人間が言語を用いる以前の生のあり方、あるいは言語と概念によっては律し切れない生の側面を垣間見させてくれると言えよう。

第二に、音楽はある意味では宇宙（天地）と繋りを持つと考えられていたからである。音楽を「鳴り響くもの」として对象的に捉え、音楽作品とか曲という形でいわば〈もの〉化して捉えている現代の我々には、そのような考え方もまた受け容れ難いものに見えるであろう。古代のギリシアでは、特にピュタゴラス主義においては、宇宙を構成する原理と音楽の基礎をなす響和音程やリズムを構成する原理は共通のものであると看做されていた。つまり、数「10」に含まれている「1, 2, 3, 4」という四つの数（「テトラクテュス」）はそれぞれ、点、線、面、立体の原理であると同時に、音楽にとって基本となる響和音程（オクターヴ〈2 : 1〉、完全5度〈3 : 2〉、完全4度〈4 : 3〉）の数比を構成する原理でもあり、さらにはこれらの数による「同数比」〈 $n : n$ 〉「倍数比」〈 $n : 1$ 〉、「部分付加数比」〈 $(n+1) : n$ 〉は音階およびリズムを構成する原理として用いられた。従って、今述べた意味で宇宙の原理と音楽の原理が共通であるということは、宇宙は音楽的な原理によって成り立っているということであり、言い換えれば、この宇宙には到る所に音楽が満ち満ちているということに他ならない。

これに対して、古代の中国では「数」とは別のものを媒介にして宇宙と音楽の繋りが考えられていた。万物の原理である「道」の発現としての森羅万象を音楽（「天籟」）と看做す道家的な音楽観はここではさておき、それぞれ天と地に配当される「陽」と「陰」の二気から万物が構成されるという当時の一般的な考え方に従えば、音楽は自然に存するのではなく人間によって生み出されるにもかかわらず、音楽もまた「陰」と「陽」の二気からなるものであった。従って、音楽は「気」の一つの形態であり、「気」によって構成されるものであるという意味で宇宙と繋りを持っていた。

それでは、現代とは異質の音楽観を持っていた時代の音楽論を研究して何になるのか、と訝しく思う人があ  
るかも知れない。音楽を表わす言葉として古代ギリシア語には「ムーシケー mūsikē」、古代中国語には  
「樂」という言葉があったが、一般的に言えば、音楽を表わす言葉の使用法は古代、中世、近世、現代と時代  
によって変化する。これは音楽の営みそれ自体の形態が時代とともに変わって行くという意味では当然である  
とも言える。だが、音楽を表わす言葉の使用法の変遷は実はこの事実以上のことを含意している。つまり、音  
楽を表わす言葉の使用法が時代とともに変わって行くということは、「ある時代の人に音楽であると思われたもの  
も、別の時代の人には音楽には見えないかも知れない」という可能性と同時に、「ある時代の人には音楽には  
見えないものも、別の時代の人には音楽であると思われるかも知れない」という可能性は含意している。例え  
ば、古代ギリシアのピュタゴラス主義者にとっては存し得た「宇宙の音楽」も、近代・現代の人々にとっては  
聴覚によって捉えることが出来ないが故に音楽とは認め難いと同様に、現代西洋の前衛音楽（例えば電子音  
楽）のようなものは現代人にとっては音楽であっても、古代の人々には多分音楽ではなくて騒音としか感じら  
れないであろう。

従って、現代とは異質の音楽観を持っていた時代の音楽を研究することは、音楽をより広い視野に立って音  
楽を可能にするのみならず、我々自身の音楽観、我々の時代の音楽の捉え方を反省する手掛りを与えると  
言うことが出来よう。古代の音楽論を研究することは過去において「音楽はどのような仕方であったか」を明ら  
かにすることを目的とするばかりでなく、未来において「音楽はどのような仕方であるべきか」を考えるた  
めのものでもなければならない。

東西の古代の哲学者たちが音楽の力に注目して音楽について論じ、音楽の背後に宇宙との繋りを見出した  
ということのうちには、一つの形而上学的に深い意味が隠されていると私には思われる。事実、プラトン、アウ  
グスティヌス、康といった人たちは音楽の本質についての透徹した洞察を通じて、それぞれなりの仕方  
で「人間はいかにあるべきか」という問題を探求したのである。

音楽は非物体的なものであり「見えも触れられもしないもの」であるという性格を持ち、鳴り終った後には  
何も残らない。この限りでは音楽は我々の命に似ている。人間の身体の物的なものであり「見え触れられる  
もの」であるのに対して、命それ自体は非物体的なものであり見ることも触れることも出来ない（人間が死ぬ  
としばらくの間屍体が残るが、屍体はかつて生きていた身体の残骸であって、命の残骸ではない）。従って、  
我々の命を我々が生きている間身体のうちで鳴り響いているという意味で音楽に喩えることも不可能では  
ないだろう。

しかしながら、音楽はむしろこの世に存する様々な事物のあり方を象徴するものと看做されるべきであら  
う。既に述べたように、音楽は非物体的なものであり「見えも触れられもしないもの」ではあるが、だからとい  
って存しないということにはならない。この世に存する事物は存続期間の長短の差こそあれ、いずれも永続せず  
消滅する。だが、永続しないということは無であることを意味するのではない。大乘仏教の説くように、この  
世の事物は諸々の原因と条件の集りによって、丁度蟹気楼や眼病の人に見える翳り（空華）のような仕方  
で、この世にある期間存するのである。従って、その本質上実体として捉えられ得ない音楽は、「空」から来  
て「空」のうちに花開き、そしてまた「空」へとまた帰って行くこの世の事物の象徴と看做すことが出来  
よう。

音楽をこのような仕方捉える時、音楽は我々がいかに生きるべきかを示す指針となり得る。我々は数十年  
（高々百年）の生を送るべくこの世に生まれたが、我々は「空」の認識と「空」の体現を通じて、我々自身  
の命を全き仕方鳴り響かせなければならない。音楽美学、ギリシア哲学、中国古代の哲学、大乘仏教とこれ  
まで歩いて来た私の道を振り返ってみる時、白髪も増え髪もめっきり薄くなり始めた最近になって、古代の音  
楽論の研究を通じて音楽と人間の「あるべき姿」を哲学の問題として論じるという、若き日に抱いた構想が  
実現し始めたこと（対話篇「空華」）に喜びを覚えると同時に、この仕事に没頭することが出来ないことを恨め  
しく思っているのが現状である。

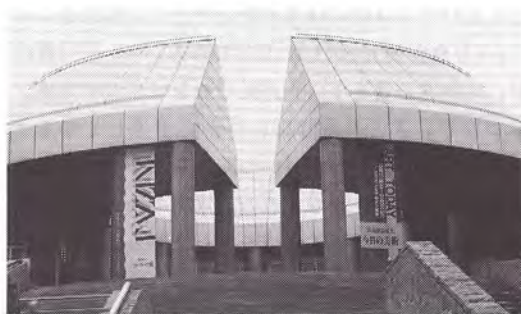


シリーズ“街の総科”

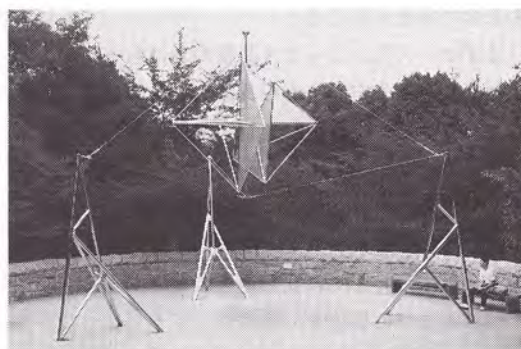
## 「段原再開発事業」について しみじみと考える！

今、比治山周辺が熱い。現代美術館はぶっ建つわ、鶴見橋はぶっ架けるわ、トンネルはぶっ掘るわの大きさである。しかもさらにその東側、段原では「段原再開発事業」なる何やら怪しげな動きがみられる。実態を調査すべく、我々は取材を行った。

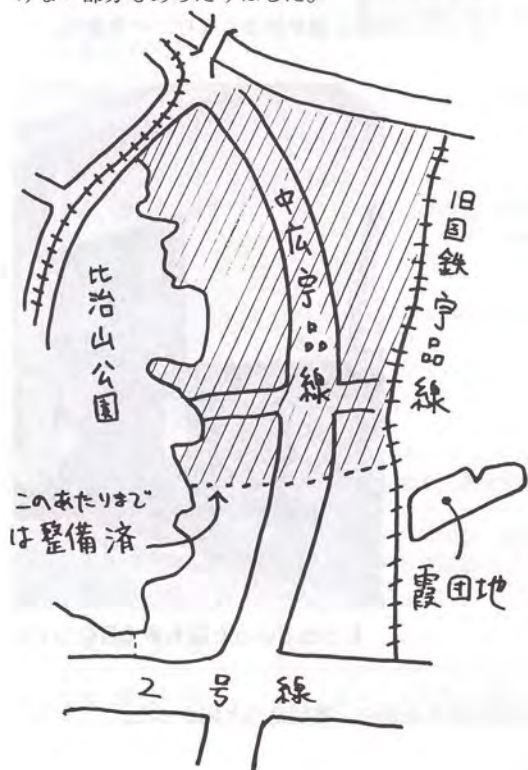
まず、我々は比治山北部の現代美術館を襲撃した。「ひろしまの公園」（1988年度版・広島市公園協会）によれば、比治山一帯は正式には「比治山芸術公園」と呼ぶのだそうだ。政令指定都市への移行を記念して、1980年10月に基本計画が策定された。翌年から整備に着手、1997年の完成を目指す。その一環として建設されたのが、この現代美術館なのである。（今後は、博物館建設などが予定されている。）——黒川紀章の設計による現代美術館は、偉そうにそびえ立っていた。が、それは超モダンな外観を持つと同時に、自然とも調和をなすなかなかあなどれない奴なのであった。展示作品とはいえば、やったもん勝ちの現代美術がずらりと並んでいて仲々ついていけない部分もあったりはした。



現代美術館。えらそーである。



これは一体何なんだろう。



次に、我々は問題の段原地区におりたつた。ここで「段原再開発」について少し説明しておく必要があるだろう。1978年に制定された住環境整備モデル事業制度を当初からすすめられていた土地区画整理事業に適用する。それによって、この地域の不良度の高い住宅を除却し、整備した後もとの土地は所有者に返すというのが主な目的とされている。（昭和63年度・広島市都市整備局事業概要）

◎東端は比治山、西端は旧国鉄宇品線、北端は猿猴川、南端は2号線。この中の地区が再開発される。斜線部は今後の再開発予定地。中広宇品線は1995年に貫通予定。



この計画の目玉は、なんとといっても幅36m・両側3車線という馬鹿でかい中広宇品線である。こんなに広い歩道と、いかにも再開発しているぜといった風情のおしゃれな店やモダンなマンション・ビルが立ち並んでいる。景観保護の規制があるのだろうか。とてもパチンコ屋には見えないパチンコ屋を見つけた。(写真参照)。試しに入ってみる。——千円負けた。くそお覚えていやがれパチンコ「ダイヤモンドプラザ」！この借りはいつか必ず返してやる！我々は異様に盛りあがりつつ北上し、今後の再開発予定地区へと足を踏み入れた。馬鹿でかい中広宇品線が途切れ、街の様子がガラリと変わるのでその境界線はすぐわかる。以下、再開発のための立ちのき日が迫っていくにつれて住民の心はどういう変化をするのかについて、典型的な3ケースの事情聴取があるのでのせておこう。

まずケース①。こっとう品屋のおばちゃん。2年後に立ち退き予定。市から具体的な計画発表、説明はまだない。「もうあそこまで道がきたら文句の言いようはない。」とおっしゃっていた。が、まだ先のことだろうというので、あんまり心配はしていない様子である。ケース②。薬局のおばちゃん。今年12月～来年2月までに立ち退きの地区である。整備が終わるまでの仮住まい物件を、市から2つ紹介されたが、人通りの少ないところに店出してもしょうがない、とグチっておられた。独立した息子さんは、「もう店たたんで一緒に住もうや」とは言ってくれているのだが、働くのは好きだし…。と、いよいよ立ち退き日が近づいてきてゆれるおばちゃんの心なのであった。ケース③。果物屋のおばちゃん。今年8月に立ち退きということで、もうあきらめの境地に達している。工事の音はうるさくありませんかと質問したら、「うるさいけど、うちもつぶす時にはうるさいやろから、お互い様です。」とおっしゃっていた。…うーん日本人だなあ、と感慨にふけていると、このおばちゃんは衝撃的な事実を我々に教えてくれた。「立ち退き近づいてくる、いうんであれこれ心配しすぎて年食った人なんかは死ぬ人もよくいますわ。」

おそらく、ケース③の境地に至るまでには、相当な精神的かつとうがあるのだろう。と、いうことはケース②のおばちゃんなんかいつ亡くなってもおかしくないのである。こんなことが、市の事業として行われて良いのであろうか。我々は、再開発に対して疑惑の念を持ちながら、震団地へと向かった。



これがパチンコ屋だ。どう見ても普通のビルなのだが、パチンコ屋は半地下にうまっている。



中広宇品線は、ここまで侵略している！  
ここから先急に道がせまくなり、一方通行。



もう出ていった店も多く目につく。



霞団地。入手した情報によれば、ここは段原地区再開発のため家を失った人々を強制収容しているコミュニティ住宅らしい。(事実を確認すると、強制収容ではなく、希望者を募ったらしい。)さてどこから調査するべきや、と考えている我々に一人の老人が近づいてきた。彼はいきなりおまえら大学生は昼間からふらふら遊びおってだの、わしはこの日本を守ったんやパラシュート部隊やったんや等、説教をし始めた。あげくの果てには我々の所持していたカメラに目をつけて、写真をとれとだだをこねる。我々はうんざりしてはやくどっかへ消えてくれ、と願っていたのだが、彼が霞団地の住民であることが判明するやいなや質問をとばした。彼は70才、一人暮らし。家賃はなんと1万10円なのだそうだ。市内のマンション築5年3LDKでこの値段は驚異的である。この団地に関して文句は何一つなさそうだ。家賃も安いし、集会所も3つ設置されている。——しかし、しかしである。果たしてこの再開発事業は本当に住民のため市民のためになっているのだろうか。我々はそんな疑問を持ちながら、この取材が終わりに近づいているのを感じていた。



霞団地。

ここにみんなとじこめられている！



説教じいさんの勇姿。

かなり酒によっていた。

霞団地の西端に、広島市都市整備局段原開発部がある。計画課の水川さんに、話を聞いてみた。

・この再開発は、何をきっかけに始まったのでしょうか？

「生活環境に関する基盤整備が1952年から始まってまして、その一環としてやってます。比治山のかけに隠れたこの地区では、原爆による被害が少なかった。が、そのために災害をのがれて莫大な人口過密が起きたんです。そのために戦後整備が立ちおくれたので、今それをやっているんです。」

・中央を走る中広宇品線は西側3車線という非常に広いものなんですが、こんなに広くする必要はあったのでしょうか？

「この線は宇品港から広島駅までをつなぐもので、既成の道路とあわせて、海～空（広島空港）～陸（広島駅）を結ぶ市の内環状線の役割を果たすものになります。そのことを考えてあれだけ広いものになったのです。」

・再開発にあたって、景観保護の規制はあるのでしょうか？

「ありません。が、景観規制はブロックごとの住民の判断によってなされています。屋根の色や、形をそろえてみたりですね。法規制をかけるには、日本の法体系がそこまで進んでいないという点もあるんですよ。」

・整備にあたって、土地は全て買いあげているのでしょうか？

「売却原則はありません。再開発後は、全てもと住んでいた人々に割合ごとにあてられます。」

・商店を営んでいる人に対するの営業保償（仮住まいによって売上げがおちた等）はなされているのでしょうか？

「移転中休業、廃業、開発地内での仮設店舗等に対する保償があります。通常は、引こし2回の料金と仮住まい中の家賃の保償だけです。」

・次に霞団地についてですが、ここはもともと何があった場所なのでしょう？

「大蔵省の官舎です。国有地を、譲ってもらったのです。」

・団地住民は全て再開発地域内の元住民なのでしょうか？

「そうです。コミュニティ住環境整備事業によるものです。」

・団地住民から不満や苦情はありますか？

「住民の方の約25%が60才以上の高齢者なんです。土からはなれて高い所に住む、ということに抵抗感を感じる人もおられるんですが、苦情はそんなにありません。」

・今後もこのような公営住宅を建てる予定はあるのでしょうか？

「霞団地以外にも、再開発地区内に4～5階程度の団地を5つ作る予定です。」

～話を聞き終わった我々の心には、何か納得のいかないものが残っていた。再開発事業は悪だ、という最初の思い込みが激しかったせいだろうか。しかし、あの中広宇品線はひろすぎる。ただの産業用道路になり果てる可能性も強い。騒音もひどいだろう。再開発を迎える地域では、心労で亡くなる人もいるのだ。それに、霞団地であつたあの説教じいさんは、どこかさびしそうだった。いくら家賃がやすくても、道路がひろくても、環境が整備されこざっぱりした街になっても、奪われたものは確かにありそれらは二度と戻らない。我々は複雑な思いをかかえながら、夕闇せまる比治山を見つめていた。

(文責：竹内 憲司)

協力・古木 二郎

カメラ提供・中家 伸之

資料提供・松岡 俊二

気合い提供・ジェームス・ブラウン



団地内に公園はあるものの、誰もいない。

小さすぎる。



# 平成2年度 春季ソフトボール大会の報告 文責：北村 綾乃

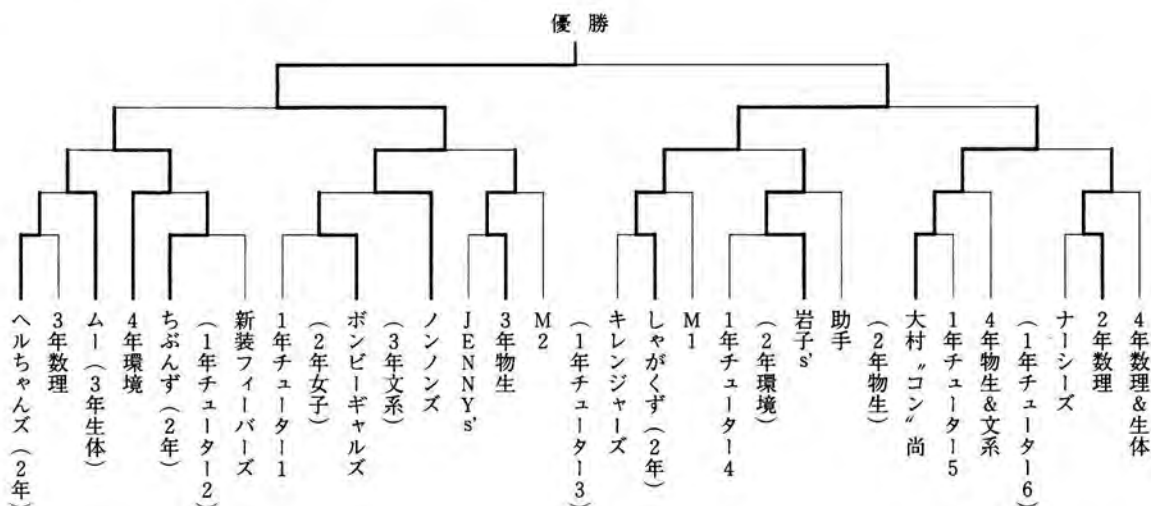
去る6月10日、総合科学部天野学部長杯春季ソフトボール大会が催されました。当日までの天候が、非常に不順で、もしかしたら延期かも、の声も多々聞かれましたが、「天は我に味方せり！」とばかり太陽も試合も暑い一日となりました。天野学部長曰く、「このように晴天に恵まれたのは、総科生の日頃の行いが良いということでしょう。」ハイ、まさにそのとうりでございます。

さて、試合の経過です。今年は、ソフトボール大会史上初という女の子 only のチーム「ボンビーギャルズ」が出場という特筆すべき事がありました。試合開始の時点で既に二桁の点数を持ち、対戦相手を次々に破っていく迫力は圧倒されっぱなしでした。特に最後の試合では、痛烈なピッチャー返しを足にうけながらも熱投を続けた01の某先輩、本当に素敵でした。惜しくも優勝は逃しましたが、見事最優秀女子選手賞に輝きました。それから同点で、決着はジャンケンでつけることになった、4年物生&文系チーム対大村“コン”尚(2年物生)チーム。白熱したジャンケン合戦は、まるで決勝戦のような盛り上りを見せてくれましたが、あれは確かまだ2回戦だったはず。勝利後のインタビューでは「このチームキャプテンで最高っすね！」と叫んでしかくれなかった01の某先輩、本当にお疲れ様でした。この大村“コン”チーム、準決勝まで進んでいます。

さて優勝チームといえば、やはりというか前評判どうりノンノンズ(3年文系)チーム。決勝戦などは初戦敗退チームとは比べものにならないくらいレベルの高い試合で、見事優勝でした。

ところで、対戦表を見ていただければすぐにわかるのですが、どうして一年生チームは勝てない？。6チームも出場していながら全て初戦敗退組に属してしまった原因は？。分析すればするほどわからなくなるんですよ。参加者の数にしろ、女の子の黄色い声援にしろ決して他の学年に負けることはない。どこかのチューターチームには、某県夏の高校野球県大会決勝で敗れる、即ち甲子園あと一歩というような実力のある選手もいる。チームワークだってそれほど悪くない。となるとやはり経験の差ということになりますか。対戦相手の先輩方チームの迫力に押され気味だったことは事実ですよ。ま、何分初めてのことで初々しく敗けていったんです。きっと。ということは、秋期の大会では不死鳥のごとくよみがえり、先輩方チームの勝利の行手に立ちはだかることは言うまでもありません。秋期の大会にも多数参加されますよう。

最後になりましたが、当日、早朝よりドロにまみれてグラウンド整備をされた方々、打ち上げまでできておられた方々、本当に御苦労様でした。



## 道の途中

山本 みつね

ひとりで歩くのが好きだった。

誰に気がねするでもなく、自分の望むペースで歩ける旅が、彼は好きだった。

故郷を出て、二年と半分が過ぎていた。まだ大陸の北の方をうろうろしているだけであったが、急ぐ旅でもない。第一、行先も決まっていなかった旅だ。

「おぬしは閉じ込められて机に向かうには、まだ若い。旅に出るが良い。外界に触れ、その中で修練に励む方が、おぬしに相応しかろう。……」

二年半前、彼が成人した時に突如姿を消し、行方知れずとなった師の、残していった手紙。その文面に勧められるままに、彼は故郷を去った。最初はどのようにしていいかわからなかったの、取り敢えず近くの魔法大学へ赴き、専門中級クラスで比較のおとなしい魔法を、専門上級クラスで比較の物騒な魔法を、半年間研究生として学んだ。

彼は親を知らない。彼を育ててくれた黒魔道師の家の前に捨てられていたのだ。師は、彼に魔法を教える気はなかったらしい。元々が、決して悪事にはその力を使わぬと、魔法を学ぶ者なら知らぬ者はない、偉大なる黒魔道師であった。自ら望んで来たわけでもない幼子に黒魔の術など教えようと思う筈もない。

だが、物心つく前から既に、彼は少なからぬ魔法を覚えてしまっていた。師の許には、令名を慕ってやってきていた弟子たちが幾人かいたのだが、彼らの学んでいるのを横で見ている内に、勝手に身につけてしまったのである。師は決断した。こうなってしまった以上、放っておいては、力に溺れ、力の為だけに力を求め力を使う黒魔道士が生まれることになりかねない……

こうして彼は、黒魔の術の使い手としての修行を始めた。彼は好奇心旺盛な少年であった。兄弟子たちの倍近い早さで、上級魔法語をはじめとした種々の魔法語をマスターし、呪文と印の組み合わせを覚え、儀式の手順を身につけた。薬学や歴史学も熱心に学んだ。その結果、彼はわずか十九歳で、初級魔法師の試験に通り、魔法師の証となるケープを手に入れたのである。

しかし、師が兄弟子たちと共に彼の前から突然去ってしまったのは、それからわずか二箇月後のことであった。

結局、魔法大学も半年で去った。

大学を離れてからの二年を、時折は町に立ち寄って魔法師ギルドに顔を出し出し、彼は歩き続けていた。旅人の路銀を狙う野盗たちや、山に巣食う狼の群れなど行き合うことも多かったが、彼の魔法の敵ではなかった。

その晩も、夜営を襲ってきた山賊どもを“混乱”の術で撃退した彼は、結界を張って眠りに就こうとしていた。焚火の側でうずくまり、黒いマントの前を合わせて目を閉じる。

「ほうほう、これは珍しい。こんな山中にひとり旅とは」

丁度その時間こえた声に、彼は仰天して目を開けた。

焚火の向こうに、ひとりの老人が腰を下ろすところであった。彼は度肝を抜かれ、しばし口を利くのも忘れた。

「どうなされた、お若いの？ わしの顔に何か付いておるかね？」

「け……結界……」

「うん？ ああ、結界のことか。何、安心するとよい。ちゃんと張られてあったとも」

「そ、それじゃどうして此処にいるんだ!？」

「こらこら、ムキになるでない。ちょっと通してもらっただけじゃ。気にすることはない」

「と、通してもらったあ？」

「お若いの、お前さんの結界は普通の人間や獣には充分通じるが、わしなどにはレースのカーテンじゃよ。はっはっ」

「……魔道師なのか」

「わしは魔道士じゃよ。魔道師ギルドにも属してはおらん。この山の中で気楽にのんびりとやっておるのじゃ」

老人はにこりとすると、彼を炎越しに見つめた。

「……ふむ、その若さでもう魔道師の免状を持っておるのか。黒魔の術を主に学んだと見えるが、教わった相手が余程しっかりとしておったらしいの。目が濁っておらん。鋭くはあり暗いものも湛えてはおるが……。しかし、まだまだ弱いな」

老人の言葉に、青年黒魔道師はムットとしたように目を細めた。

「だから修行の旅をしてるんだ」

「無駄じゃよ」

おっとりとした断言され、彼はカッととなった。

「余計なお世話だ！ 第一、あんたが俺の何を知ってるってんだ!? 今会ったばかりじゃないか!!」

「そら、またムキになっておる」

老人は笑った。

「魔道使いたる者、そうたやすく動じるでない。修行が足りんぞ」

「だったら何で、修行は無駄だなんて言うんだ」

「修行といっても様々あろう。ひとつ所で机に向かうもあろう。お前さんのように、旅の中で力を磨くもあろう。ひとりひとりに合ったやり方というものがあるのじゃ。お前さんが今しているような方法が無駄じゃと言うておるのじゃよ」

老人はあくまで穏やかである。

「お前さんは、自分で思い立って、この旅に出たのかね？」

「い、いや、先生に勧められて……俺には外界に触れて修行する方が向いてると……」

「ほうほう……ではお前さんは、先生の言ったことを理解出来なんなのじゃな」

「……え？」

「わしはさっき、お前さんは弱い、と言った。その訳は、わかるかね」

「能力が未熟だってことだろ」

ムスツとしながら、彼は言った。

「そうではない。能力は、その若さにしてはたいしたものじゃ。しかし、お前さんは弱い。それは、お前さんに、守るものがないからじゃよ」

「守るもの……」

「率直に言えば、共に旅をする相手じゃ」

「……そんなもの……」

「お前さんは人馴れしておらん。それは、わしに対する態度を見てもわかる。外界というのは、ただ自然界のことではない。人の世界も含むのじゃよ。魔道士とばかり付き合っても、お前さんは伸びん。



確かにひとりには気楽だが、人を避けてばかりおると、お前さんのケープの色は一生変わるまい」

それ以上上級の魔道師にはなれないだろう、と暗に示されたのである。彼はぐっとなった。

「……誰が好き好んで黒魔の術の使い手に近付くもんかっ。俺が避けてるんじゃない、あっちが避けてるんだ」

「外界は鏡じゃよ。お前さんが避けておる姿をそのまま映す。恰好は個人の事情もあろうて、変えたが良いとは言わぬが……お前さんの先生も黒魔道師らしいが、人に避けられておったかね？」

「い、いや……そんなことはなかった……」

「先生は黒魔道師であることを隠しておった？」

「……俺と同じだ。黒を基調にした服装を通していらっかった」

「はっはっ……やはり、お前さんの努力が足りぬだけじゃな」

老人は楽しげに笑うと、腰を上げた。

「守るものを早う持つことじゃ。そうすれば、お前さん、才能はあるのじゃから、本当の意味で強い魔道師になれるじゃろ。——では失敬」

「ま——」

待ってくれ、と言いかけた時、既に老人の姿は宙に溶けてしまっていた。

茫然とする耳に、炎のはぜる音が大きく響いた。

吟遊詩人の<sup>サーガ</sup>歌は伝える。

その青年魔道師が“運命の八人”のひとりとして、仲間たちと共に北の果ての町から伝説の旅に出たのは、それからひと月の後のことであった、と。

<了>



今回は、前の二編とは毛色の変った  
ものを書いてみました。相変わらず主人公の  
名前が出てこない作品ですが、気  
に入っていたら嬉しいです。

では、また。

(み)



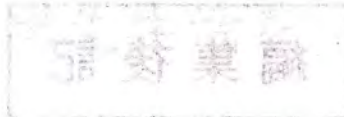
## 編集後記

“飛翔”に元気がないといわれて久しい。最近に至っては、学生は編集から手をひきたいという話もあり、あげくの果てには「驚くべき知的レベルの低さ」と評されている“飛翔”である。飛翔15年の歴史のバックナンバーを読み返せば、確かに気骨気丈覇気根気元気知性感性すべてに欠けてきているのが分かる。

「まあ最近の学生さんは、こんなもんじゃろう」なんて言葉で片づけられるのは腹が立つ。腹が立つぞおっ／＼立たないのかおまえは。え／＼どうなんだよ。そろそろもう、このかくも長きモラトリアムの日々に、終止符を打つべき時が近づいているのではないのか。

そこで／＼今回39号という区切りの良いところで、(どこがやっ)学生編集部に抜本的改革をおこなった。ベルリンの壁も崩れたのである。やってやれぬことはない。豊かな学生生活、ひいては豊かな社会の実現のためには自助自立のネットワークづくりが不可欠なのだ。4月以来、毎週編集会議を開催し、全15回、のべ50時間強にわたって討論。また、総科ピロティには、一部の失笑を買いつつも盛んに掲示を行った。来号も、気合いをビビッと入れてやってくつもりなんで、ひとつよろしくたのむぜ。

なお、飛翔編集部では、血の気の多い編集部員と活力みなぎる投稿を常時募集しています。連絡は厚生補導係の中道さんまで。



広報委員

山本 雅	友田 卓爾	森 利一
安部 剛	小野 光代	間瀬 茂
武田 隆義	佐藤 博明	楠戸 一彦

事務官

宮原 和男	中道 一博
-------	-------

学生編集委員

金澤 匡晃	中家 伸之	内田 知宏
岸本 詩子	野村 幸代	北村 綾乃
小松 千尋	山崎 明子	竹内 憲司
定行 美佳	岡村 美穂	森野 美和

広島大学総合科学部広報委員会

住所：広島市中区東千田町1-1-89

電話 (082)241-1221